
原作開始まであと何年？

代給品

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

原作開始まであと何年？

【Nコード】

N9562N

【作者名】

代給品

【あらすじ】

現代であっさり死んだ主人公は、恋姫の世界での転生を経験します。

ところが、転生先は春秋戦国末期。

主人公の廖化君、必死で生き抜きます。

恋姫設定ですが、はたして恋姫の時代まで書けるかどうか。

何しろ廖化君は今のところ不老不死でも何でもないのです。

まあ、そうなるかどうかは決めてないんですけどね。

このお話は捏造設定山盛りです。

設定に関する突っ込みはともかく、文句は一切受け付けておりません。

文章の長さに関する文句も受け付けていません。

プロットも作っていません。

頭の中で妄想した事をそのまま書きなぐっています。

傍観する救世主が煮詰まっている時に書くので、更新は蝶不定期です。

それでもよければ、ご覧ください。

注・原作キャラが出てくる予定は当分の間ありません。というより、原作キャラはまだ生まれていません。現在、秦の始皇帝が秦王だった頃の時代です。

ブログ（前書き）

ちょっと思いつきで書いてみました。

気が向いた時にしか更新しませんので、予めご了承ください。

プロローグ

プロローグ

まずは、自己紹介。

僕の名前は……あれ、思い出せない。

まあ、いいか。思い出した時にあらためて言っとしよう。

享年24歳。

今、目の前でくちゃっと潰れたトマトのようになっている物体、それが僕……だったらしい。

両親がどこかの大企業の御落胤とか、そういう可能性の全くないごく普通の家庭。

多少抜けたところはあるけれど、厳しかった、でも優しくかった父。

いつもにこにこしていて少し天然が入った、でも怒らせるとリアル貞子さんの様に怖い母。

そして、特に何かに秀でた能力を持っているわけでもなく、かといって何が苦手というわけでもない、日本全国の同年代の平均値が服を着ているような存在、それが僕。

まあ、ちよつと歴史が好きだったり、ゲームが好きだったりするが、それは個人の趣味の範囲だろう。

そんな僕は、目の前で僕だった物体の前でぼうつとしている。

なんで？

自分が死んだのであろう事はわかる。

名前が思い出せないとはいえ、その他の事はすべて覚えているのだ。まあ、死の瞬間の記憶ははっきりとはしないけど。

いや、そんな事はどうでもいい。

今気にするべきは、死んだ筈の僕が、何故それを他人事のように眺めていられるか、だ。

多分これが幽霊と呼ばれる状態なのだろうとは思う。

思うのだが、どこか納得いかない。

名前は忘れたが、あの世を見てきたという胡散臭い霊能力者。

死後の世界はあるのです、などとわけのわからん事を言っていた占い師。

その人達の言っていた事は死んだ今でも信じられない。

死んだ者は生き返らない。

あの世だろうと死後の世界だろうと天国だろうと涅槃だろうと極楽浄土だろうとパラísoだろうとそんな事はどうでもいい、死んだ者しか行けないし、そこから出るなんて事も出来ない。

大体にして、死んだ筈の僕は何もせずとも魂だけの存在、幽霊としていまだに存在している。

死神なり死出の旅路の道先案内人なりが来る様子もない。

まあ、人が死ぬ度にそんな者がお迎えにあがるとしたら、いくらいいても足りないだろうし。

そんな、この場においては何の役にも立たないような事を考えていた僕は、目の前が光ったと同時に、この世界から存在が消えうせた。

第1話

第1話

どうやら僕は転生したらしい。

良くある二次小説のように神様なんぞには会わなかったが、間違いないだろう。

ただいま、絶賛赤ん坊プレイ中なのだから。

見知らぬ女の人に抱きかかえられて、授乳中である。

これがおそらく母親なのだろう。

が、若い。

若すぎる。

おそらく15歳前後だろう。

美人というよりも美少女といった感じが強い。

おっぱいもそんなに大きくはない。

そして、父親？

その姿は見えない。

その後の会話などでわかった事は、この世界はおそらく古代中国によく似た世界であるという事。

中国語に関しては、前回の生で勉強していたのだが、正直まったくわからなかったので一から覚え直した。

元々僕の勉強した中国語は、普通語と呼ばれるもの。

その成立は近代中国、地方語が全く通じない中央から派遣された官僚の為に創られたものだという。

まあ、ベース是北京語らしいのだが。

つまりどういう事かというところ……古代中国の地方語なんぞ聞いた事ねえ、である。

どこぞの御都合主義よろしく、知らん言葉を喋る事が出来るような転生特典なんぞ持っていないので、一から必死に覚え直しました。

まあ、赤ん坊相手というのは大体使う言葉も決まっている。

そんなわけで覚えるのはそれほど難しい事ではないのです……

そして数年が経ちました。

赤ん坊プレイの事は、詳しく書くつもりはありません。

変な性癖が目覚めるといふ事ありませんでした。

そのあいだ起こった事をダイジェストで説明させてもらおうと……

親に売り飛ばされました。

そうして、誰かに買われました。

奴隷としてではなく、息子として扱ってくれたというのがせめてもの慰めです。

そうして、僕には名前が付けられました。

僕の名前。
廖化。
りょうか

これって三国時代の武将だよな。

確か、黄巾党の時代から蜀の滅亡まで（約80年、確か黄巾党が184年、蜀の滅亡が262年だったと思う）戦い続けたとんでも人間。

まあ、それは光栄なゲームの中での話だし、演義の中での話なので、

正史ではそんな事はなかったのだが、長生きした人には間違いない。

うん、長生きした人なのは別に構わないんだけど、ね。

姓名、字の他に真名ってものがあるんだよ。

まあ、生まれたばかりなので字も真名もまだつけられてはいないのだけど。

真名って、もしかしてここはゲームの世界？

あの、乙女だらけな三国志の世界？

天の御遣いとかいう女だったらしが好き勝手やる世界？

その世界に転生したって事？

……人生、やり直せてよかった……

天の世界、つまり前世の知識ならくつきりばっちり持ってます。

おまけに恋姫の世界の知識も持ってます。

真・恋姫の世界の知識だって持ってます。

二次創作の知識だってばっちりです。

つまり、人生勝ち組になるのはそう難しい事ではない。

戦うのは怖いから内政専門で。

可愛い女の子ときゃっきゃうふふな世界が僕を待っている。

あつた事ないけど、神様ありがとう。

もし会えたら、あなたに僕の初めてを捧げます。

いえ、エッチな意味ではありませんよ。
初めての信仰の対象にするという意味ですよ。

そう思っつて、高まっていたテンションは、その次の瞬間、地の底まで叩き落とされました。

現在、春秋戦国時代末期。
秦による統一まであと20年。

僕の嫁は……………僕の嫁育成光源氏な計画は……………

発動する前に根元からばつきりと折られてしまったのです。

なんで？

廖化つて三国時代の武将でしょ？

同姓同名の別人？

そんな、何の役にも立たないサプライズいらねえ！

まあ、元々エロゲの世界。

つまり、女の子はみんな可愛いのです。

そして、恋姫の世界。

つまり、女の子はみんな強いのです。

それでも前世知識というチートを僕は持っている。

この時代の知識だつて持っている。

上手くやれば、人生勝ち組になる事は難しくはない筈っ！

一刀君に出来た事が僕にできない筈はないっ！

うん、たぶんね。

それから更に10年。

お父さんの商売は、いわゆる武器商人です。

そしてこの時代、武器を作るのに使われるのは銅、青銅がメインです。

そういうわけで、作ってみました鉄の武器。

自分で鍛冶やって鍛え上げました、なんちゃって刀。

一応いろいろ試行錯誤して鍛え上げたので、かなりの業物に仕上が

つてますよ？

勿論、鎧兜も抜かりはない。

というか、武器はヘタレでも構わないが、防具がカスだとすぐ死ぬので、気合い籠めて作りましたよ。

鋼のフルプレートアーマーを！

すいません、やり過ぎですね、明らかに。

この時代の軍の皆さんの装備は、青銅の戈などがメインです。防具として一般的なのは、竹片で作った鎧や、革製の鎧。青銅製の防具を使えるのは將軍クラスのみ。

そんな中で鋼のフルプレートアーマーとなんちゃって日本刀。オーバーキルも大概にしろと言われても反論のしようもない代物です。

まあ、実際使えるようになるまでには血のにじむ、というより文字通り血のしょんべん出して必死に修行しました。何度も死にかけました。せっかくの武器も防具も使えなきや意味がありませんからね。着こんで動けなくなったら、ただの的ですからね。

この世界の武將は、気とかいって直接内部に衝撃を与えてきたり、身体強化してとんでもない馬鹿力を出してきたり、そんな人もいるので武器と防具が良くってもあんまり安心できないのです。

そんなわけで、僕も習いましたよ。
そして使えるようになりましたよ。
何がって？勿論、気ですよ。

まあ、気を使えるようにならなきゃ、せつかくの武器も鎧も無用の
長物と化しそだったの。

ええ、気合い入れて作ったのですが、正直重すぎるんですよ。

鋼のフルプレートアーマー、重さは120斤（約60？）
なんちゃって日本刀、重さ10斤（約5？）

着込んだだけで、どこの子泣き爺だと言わんばかりにのしかかって
くるんですよ。

総重量130斤が。

そりゃあね、動けませんよ。

気でも使わないと、すぐにスタミナ切れですよ。

素早く動けるようになるには苦労なんてもんじゃなかったですよ。
サンズリバーで前世の僕が手招きしていましたよ、なぜか。

内政専門でやるうと思っていたのですが、やっている事は……

いいんです。

まずは生き残らなきゃ意味がないんです。

可愛い女の子はこの手につかむまで、僕は暴走はしり続けるんです！

そんなこんなで過ごしていた、ある日。

ただいま僕の目の前には王子さんが一人立っています。

大秦の王子様。

名前は政^{せい}。

どう考えても、のちの秦の始皇帝な方です。

これから、どうなっちゃうんですかねえ。

第2話

第2話

やってきたのは政王子様^{せい}。

もう間もなく秦の王となる偉い人。

まあ、咸陽にいますからね。

いつかは会う機会もあるかもとは思ってましたよ。

トンでも兵器も作ってますしね。

でも、せめて王となってから来てほしかったんですよ。

なんせこの政君、宰相と太后の不義の子という嘘かほんとかわからない噂がまことしやかに流れている人ですから、敵が多いのです。

まあ、実際は宰相の愛妾だった時に身ごもったまま秦王の室に入っただというのが正しいので、不義の子というわけではないのですが、それでも秦の血をひいていない事だけは確かなのですよ。

秦王の愛妾になってから7カ月で生まれたから、ほぼ間違いありませんしね。

弟さんは間違いなく秦王の子供なので、有力者や血を重視する人はみんなそっちに流れています。

政君についているのは、宰相の呂不韋一派ぐらいなものです。

まあ、現役宰相でお金持ち、冷酷非道で極悪人な人なので、敵対する人にはご愁傷様と言っておきます。

それにこのまま歴史通りに行けば、その呂不韋さんとも敵対してし

まいります。

僕の知っている歴史通りに話が進めば問題はないのですが、ここは恋姫の世界？だと思われるので、いかな可能性もあるんです。だって恋姫だって、董卓が可憐な美少女だったりしたじゃないですか。

そんなわけで、できればもう少し出会いを先延ばしにしたかったですよね。

まあ、そんな事を今更言ってもしょうがないのですが。今、目の前にいるんですから。

「これはこれは、政太子ではないですか。このような鄙びた店にどのようなご用で？」

言外にさっさと帰れという意味を読み取ってほしいものです。

「うむ、その方名をなんと申す？」

読み取ってくれませんでした。

まあ、自らこの店に足を運んできたので、望み薄だとはわかってはいましたが。

「姓は廖^{リョウ}、名は化^カ。しがたい武器商人でございます。お言葉をかけていただける価値などはないかと」

それでも必死に抵抗する僕。

何を言われるかはわからないが、大体の想像はつく。

僕の作った廖化印の武器・防具の購入についてだろう。

鉄製の武器・防具は僕以外で作れる人はいない。

おまけに僕は自分が気に入った人にしか商品を買らない。

今まで作った作品はすべて名のある将軍が持っている。

例えば白起、李牧、魏无忌、廉頗、呉起、孫武など。

まあ、正史だったらとつくとくに死んでいる筈の人もいるのだが、この世界はその辺り蝶アバウトなので、あまり深くは考えない。

太公望とか出てこないだけましというものだろう。

ちなみに全員女性です。

みんな美人で嬉しい限り。

そんなわけで僕の作る武器・防具は武将にとっては垂涎の的である。入手条件はただ一つ、僕が気に入る事。

まあ、ぶつちやけ有名な人にしか作ってません。

今作っているのは、王翦さんの物。

この娘はまだ10代半ば。

それでもものすごく強いんです。

まあ、秦の統一にもっとも功のあった將軍なので、当然なのですが。

まだ成長過程なので、武器はともかく防具に関しては時々手直しもしなければいけません。

でもいちいち手直しをしている時間なんてそうそう取れないでしょう？

だから多少余裕を持たせて仕上げているのですが、動きの邪魔にならないようにするのは難しいですよ。

「今は忙しいので、今度暇な時にでも来てください。あ、勿論僕が暇な時にですよ?」

僕が政君に向かって強気に出れるのにもわけがある。

先程言ったように、僕の作った物は各国武將の垂涎的。

七国の武將すべてが僕の作った物を身に纏いたいと願っていると言っても過言ではない。

そうになると、下手に僕に手を出せば、残りの六国は黙っていないのですよ。

それに僕も修行をしたおかげで、將軍と同等クラスの武を持っています。

つまり僕に下手に手を出すと、六国が敵にまわる上、僕自身も敵にまわるのです。

そうなれば、当然ながら僕の作った武器・防具を手に入れる事は二度とできなくなります。

大体ここにいるのは質の良い鉄鉱石を手に入れやすいからだしね。どうしてもここでなくてはいけないという理由はないのです。

「そうか……一度そなたと語り合ってみたかったが、忙しいというのであれば是非もない。いつ頃時間が空いておるかは教えてくれぬのか?」

しょぼんとした政君に、ちょっぴり罪悪感を覚えてしまいます。

元々この子の事は嫌いじゃないんですね。

逆境にもめげずに頑張っていますし、民衆にも優しいので、きっといい王様になれると思っています。

男の子にこういうのは失礼ですが、可愛らしいですし。

ああ、僕は別にそちらの趣味はありませんよ。

ただ、政君は庇護欲をそえられるような可愛らしさがあるのです。

秀囲気的には恋姫の董卓ちゃんに似ていますね。

まあ、見た目も性格も性別も全然違うのですが。

「そうですね、今抱えている仕事が終わったら、連絡させていただきますよ。それでよろしいですか？」

もうちょっと後が良かったけど、もう出会ってしまったのだから仕方ありません。

これも運命だと思って諦めましょう。

いえ、諦めたくはないんですけどね。

第3話

第3話

「廖化さん、僕の頼んだ物出来た？」

数日後にやってきたのは王翦さん。

10代半ばの金髪碧眼の美少女で、胸の発育はちょっと残念な……

チャキツ

「今なんか変な事考えてなかった？」

「いえいえ、そんな事あるわけないじゃないですか」

忘れてた、王翦さんとはとっても勘が鋭いんだ。

孫武さんと互角だと思う。

ボーイツシユなショートヘア。

人間離れした怪力と勘の持ち主で、頭もいい。

まあ、その頭の良さは戦にしか向かないので、日常生活は壊滅的なんだけど、ね。

身長は160?ぐらいかな？

体重は……まあ、筋肉の所為で、乙女としてはちょっと重……

ブオンツ

そこまで考えていたら、僕の頭を粉みじんにしてくれると言わんばかりの勢いで、王翦さんの槍の石突が降ってきた。

刃先じゃないのは手加減してると言いたいのだろうけど、籠められ

た力は間違いなく本気。
頭で受けたら間違いなく、潰れたひき肉になってしまいます。

「やっぱり変な事考えてるでしょ、僕、わかるんだからね」

かろうじてかわした僕に槍の刃先を突き付けてくる王翦さん。

「いえ、別に変な事ではありませんよ。あくまでも事実ですから
……へえ、その事実って、なに？僕に聞かせてくれるかな？」

うん、対応間違えましたね。

地雷の上でロデオをかましてしまったようです。

「ああ、そういえば王翦さんの御注文の品でしたね。今取ってくる
ので待っててください」

そういつて奥に逃げ込みました。

ちょっと対応を間違うと命が危険な王翦さんですが、とってもいい
子なんですよ。

まあ、命は惜しいので恋愛関係に持っていこうとは思っていません
が、弄りやすさはぴかーです。

白起さんは戦闘狂だし、李牧さんは馬や動物と遊んでいるのが大好
き。

廉頗さんは藺相如さんとっても仲良し、うん、多分百合百合しい
関係にあると思う。

これも刎頸の交わりって言っていていいんだろうか？

魏无忌さんや呉起さんは政治関係で忙しくて、大変。
2人とも宰相とかやってるからね。

孫武さんは……うん、孫策や孫権の御先祖様なんだよね……ほんとよく似ているんだよ。

特にあの我が儘なところとか、無駄に勘の鋭いところとか。

孫子の兵法書を書いたのはこの人ではない、うん、絶対。

書いたのは彼女の幼馴染で制止役の苦勞人、伍子胥さんだろう。

孫武さんが乙女の勘全開で戦って、その後でどうしてこうなったかを上に報告する為に、いろいろ理由づけしていったら、なんか兵法書になっちゃったそうだし。

それが後世に孫子の兵法書として伝わったんだろうな。
トンでも歴史だわ。

王翦さんのいいところは弄りやすさと、熱しやすく冷めやすいところ。

弄ればすぐに反応が返ってくるし、ちょっと時間をおけばすぐに元通り。

何度でも繰り返し弄れるのが魅力です。

そんな彼女の為に作ったのは、馬に乗る事が多いので出来るだけ馬の負担にならないように軽量化しつつ、強度を残した優れ物。

まあ、基本鎖帷子なんだけどね。

ところどころで、サイズ調整できるように手を加えたんですよ。

戦働が多いので、そう簡単にはこちらに戻って手直すするわけにもいかないですからね。

王翦さんは僕と同じ年なんですけど、身長に関しては僕より低いです。そんなわけで初対面の時に王翦ちゃんと言ったんですが、顔を真っ赤にして暴れ出しましたね。

なんでも子供扱いされてるみたいで嫌なんだそうです。

子供扱いされて起こるなんて子供って証拠じゃん、と言ったらぼこぼこにされました。

ええ、それはもうスーパーの野菜人のように髪を逆立てて、ね。

あの王翦さんには勝てる気が全くしませんでした。

そんなわけで、彼女の呼び方は王翦ちゃんではなくて、王翦さんです。

真名は一応受け取りましたが、真名で呼んでも問答無用にしかかれ
ます。

そんな王翦さんの真名は、彩耶みさやです。

子供っぽくて嫌なんだそうです。

そういう不満は親に言ってください。

僕がつけたんじゃないんですから。

王翦さんに頼まれた鎧一式、それと武器を持って彼女のところに戻ります。

彼女の為に作った武器は、青龍金剛刀と言います。

まあ、ぶつちやけ関羽の青龍偃月刀をパクった物です。

蜻蛉切りにしようか迷ったんですけどね。

まあ、彼女なら使えるでしょうという事で。

僕の渾身の作品を見た彼女は、それはもう喜んでくれましたよ。

ええ、お金を払うのも忘れるほどに、ね。

早速鎧一式着込んで、金剛刀片手に飛び出して行きました。

向かった方角からすると、訓練場に行っただんでしょね。

テンションMAXな彼女の相手をする人には、気の毒な事をしたと思います。

今度、傷薬でも差し入れに行つてあげましょかね。

ああ、これで注文も終わった事ですから、政君に連絡でもしましよ
うかね。

第4話(前書き)

三時間おきの連続予約投稿。

これがラストです。

第4話

第4話

ああ、そういえば政君の姓を言っていないませんでしたね。

姓は嬴、諱が政です。

まあ、諱というのはよくわからないので、普通に政君と呼んでいきます。

別に怒られるわけではありませんから。

この世界ではどうなるかわからないけど、僕の知っている歴史では秦の始皇帝として有名です。

まあ、早死にしていますし、項籍さんや劉邦さんに国をとられてしまうんですけどね。

そんな事は後から考えればいいわけです。

明日の事は明日考えればいいのです。

取り敢えず、政君にはお手紙を書きました。

待ち合わせ場所は柳巷です。

まあ、ぶっちゃけ花町です。

綺麗な女の人とお酒を飲んだりするところです。

咸陽で一番大きな花町である柳巷。

その中でも一番値段が高くて、綺麗なお姉さんのいる星沁楼が今日のお目当てです。

人のお金で飲むお酒が一番美味しいですからね。

それに相手は儲君ちよくんなのですから、それに見合った格の店を選ばなくてはなりません。

ちゃんと信用できる店を、という事です。

ちなみに儲君とは、王の跡継ぎ、つまりは王太子の事です。

手紙を出して、うちの店を警備してくれている兵士さんに渡せばあとは返事を待つだけです。

ああ、基本的に僕は気が向いた時しか仕事をしません。

正確には気に入ったお客さんが来れば、ですね。

まあ、以前作った廖化印の武器・防具だけで既に一生働かなくても食べていけますし。

店に置いてあるのは、僕が多少手ほどきした職人さんが作った物ばかりです。

青銅製ですけど、他の店で売られている物より質はいいですよ。

ちなみに鉄製の物は廖化印の物だけです。

むやみに作ったら、命が危険で危ないですからね。

今まで作ってあげた人達とは、全員お友達ですし。

まかり間違つて僕のいる町を攻める事になつても、指一本触れないよう約束してあります。

破つたら、僕が直々にお仕置きしにいきます。

具体的には鋼のフルプレートアーマーとなんちゃって日本刀でお仕置きします。

どちらも鋼で作ってありますので、武装面では圧倒的に有利です。

まあ、気を使ってこられるとかなり厳しくはなるのですが。

負ける事はありません。

こう見えても僕だって將軍クラスの武を持っているのですから。

気だって使えますし、ね。

まあ、人外認定の人とやる場合はかなり厳しいんですけどね。それでもなんとかなるものですよ。

漢女おとめさえ来なければ……

恋姫の時代にもいましたが、この時代にもいました。名前は西施です。

ええ、歴史上名高い美人のあの方です。
鬢ひそみになら倣う、のあの方です。

絶世の美女、傾国の美女と言われる西施ですが、この世界では油ギツシユなつるつぱげのむきむきマツチヨです。
殆ど紐に近いショッキングピンクのふんどし締めています。
というか、身につけているのはそれだけです。
太陽が頭に当たれば、リアルムスカができます。

初めてあつた時はショックで心臓が止まりました。

人工呼吸してこようとする化け物を必死に止めてくださつた皆さんには感謝の言葉もあります。

薄れゆく意識の中で、恋姫の世界だという事を死ぬほど実感させていただきました。

まあ、実際死にかけたわけですが。

この調子でいくと、歴史上有名な美人さんはみんな漢女なんだろうなあ。

実際その通りで、史上最初の漢女は、みなさんご存知、封神演義で有名な妲己だうきさんです。

殷の紂王じゆうおうはガチホモだったそうです。

なんでも、漢女を集めて酒池肉林の世界に入り浸っていたそうです。想像したくもない世界です。

さっさと滅んでくれてよかったです。

ちなみに殷周革命の理由は周の文王の長子、伯邑考はくやくこうさんが、ガチホモの餌食になった事が原因だそうです。

この世界の歴史は、僕の知っている歴史とは全然違います。知りたくなかった歴史でした。

まあ、そんな事はどうでもいいのです。

おぞましい歴史の暗部に心を震わせるより、美しいお姉様達がいるあーんな涅槃の世界が僕の身も心もとろけさせようと待っているのです。

政君からの返事もきました。

今日の夕刻に、という事です。

そうと決まればこんな事はしてられません。

美味しいお酒を呑む為に、適度な仕事と運動を欠かすわけにはいきませんから。

夕刻までは気合をいれて働くとしましよう。

第4話（後書き）

取り敢えずはここまでです。

次の更新は決まっています。

というか、まだ書いていません。

この話で書きたかったのは捏造設定の方です。

殷周革命の原因とか、史上最初の漢女とか。

封神演義が好きな方には石を投げられるような設定ですが。

更新の方は気長にお待ちください。

第5話（前書き）

指が止まらないって事で。

一日で総合評価が100越え。

メインの小説より伸びがいいんですけど……

自信を持っていいのかわ落ち込んだらいいのかわ……
複雑な気分です

力を入れてる方が評価が低いとはこれいかに。

本日も何話か投稿したいと思っています。

まあ、指の動き次第というわけですが。

第5話

第5話

そんなわけでやってきました、星沁楼！

可愛い女の子がいっぱい、夢いっぱい。

男のパライソ、星沁楼。

おさわりOK、お金を積みめばお気に入りのあの子とにゃんにゃん出
来ちゃう星沁楼。

ここはまさに地上の楽園。

そんな星沁楼に来て、美人さんを両脇にお酒を飲んでいるわけなん
ですが……

政君が暗いです。

落ち込んでいるとかいうレベルではありません。

地の底まで潜っていきそうなほど暗いです。

せつかく綺麗どころを取りそろえているんですよ。

星沁楼トップの4人がこの席についているんですよ。

口移しでお酒を飲ませてくれるんですよ。

これでテンションあがらなきゃ男じゃないってシチュですよ。

なのに暗い政君。

1人で浮きたっている僕がバカみたいじゃないですか。

「政君、どうかしましたか？」

さすがに辛抱たまりませんのでとりあえず聞いてみる事にします。
やっぱりお酒は楽しく飲みたいじゃないですか。

「あのですね……内密の話があるので、少しの間こちらの女性達に
下がってしてもらえないでしょうか？」

ああ、そういう事ですか。

女の子の前では言い辛い話なのでね。

「わかりました。すまないが少しの間向こうに行ってくれないか？」

「えー、今日は私達みんな廖様の貸し切りなんですよ」

「そうですね、せっかく今日は夜の事までって張り切ってたのに…

…」

「ちょっと丹、蓉、あまり廖様を困らせるんじゃないわよ」

「そうそう、柔お姉様の言つとおりですわ。がつつきすぎると嫌われ
ますわよ」

丹、蓉、柔、蘭の4大名妓はなんとか納得して離れてくれました。

それにしても今晚は寝せてもらえそうにありませんね。

まあ、嬉しい限りです。

「さて、これでいいですか？」

彼女達が下がった事を確認してから、改めて政君に話しかけます。

「すまない、女性というものがどうも苦手ですね」

えーと……もしかして政君はそっちの趣味の人なんでしょうか？
ひょっとしたら狙われてるんでしょうか？
今すぐ帰りたいです。

「……ああ、誤解しないでくれ。別に男色というわけではないから」
僕がさりげなく距離を開けたのに気づいたのでしょうか。
慌てて否定してきました。

「そうですか、もしやそちらの方が役に立たないのです？」
「だから違うって言うてるだろ。僕はごく普通に異性が好きなんだ」
「安心しました。さすがに男を抱く気も男に抱かれる気も持ち合わせてはいないので、誘われたらどうやって断ればいいかと……」
「だから……」
「わかってますよ。それで今日はどのようなご用件ですか？ 雰囲気的には私の店の品物がどうのという感じはしませんが」

実際予想外です。
てつきり廖化印の武器・防具を頼まれるかと思っていたのに。

「いや、君の噂は聞いているからね。それは仲良くなって作ってもらえるんならうれしい限りだけど、今は置いておこう。実は、暫くの間僕に雇われてほしいんだ」
「は？ 僕を雇うって……本気ですか？ 他の六国が黙っていませんよ？」

自慢ではありませんが、僕の身柄については七国間で暗黙の了解が
出来ています。

僕は自分の自由を完全に保証されているのですから。

たとえ秦が随一の大国でも、残りの六国を敵にまわすのが厳しい事は確かです。

だからこそ、遠交近攻だの、合従連衡だのとおばちゃん達が各国を飛び回っているんですから。

そんな事はわかりすぎるほどわかっている筈なんですけどね。

「……うん、そうだよ。無理を言っているのはわかっているんだ。でも今はどうしても信用できる人間が周りに欲しいんだ」

「へ？信用できる人間ですか？僕と政君は会ったばかりですよ。信用できない以前の段階じゃないですか？」

「いや、君の事は王翦から聞いているんだ。彼女の依頼を引き受けてたろ？」

「ああ。納得です。でも僕には貴方に対する忠誠心なんてありませんよ？そんな事ぐらいわかっていると思いますけど」

「ああ、会ったばかりの人間に忠誠を尽くせとか無理な事は言わないよ。そんな事したら六国の動きが怖いしね」

「ならばなぜ？」

「……ここだけの話なんだが……実は父王がそろそろ危ないんだ。おそらくあと数日持つかどうかだろう。王位を継ぐのは僕という事になっているが、弟の一派の勢力は強いし、僕を立ててくれている宰相呂不韋の一派も信用できない。幸いな事に君は派閥なんかには全くの無関係だしね。まあ、元々秦の臣民ではないというのが大きいんだけど。そういうわけで何とか僕の王位が安定するまで力を貸してもらいたいんだ。頼む、この通りだ」

そついうと僕に向かって深々と土下座……いや、叩首うしゅを始めた。

叩首とは叩頭ともいわれる、膝まずいて頭を床に打ち付ける礼法である。

通常これは君主に向けられる。

あとは自分より目上の人……師父ぐらいかな？
つまり政君はそこまでして僕を味方に引き入れたいと意思表示しているのだ。

前世の記憶はまるまる持っているけど、僕はずっとここで育った。
だから、この礼がどれだけ重いものかもよく知っている。

これは、負けかな……

まあ、政君が秦の始皇帝になってくれないと困るしね。

「わかりました。客将としてしばらくの間お傍に仕えさせていただきます」

政変に巻き込まれるのは怖いけど……

ま、まあ、なんとかなるよね。

なんとかなるといいなあ……

第6話(前書き)

続けて逝きます。

第6話

第6話

そんなわけで政君の客将として働く事になった僕。

しばらくは鍛冶屋としてのお仕事もお休みである。

だって、ね。

鍛冶屋として雇われたなんて思われたら、他の六国が何して来るかわかんないでしょ。

最悪、というか、普通に戦争になってしまいそうです。

そこまでいなくても、誘拐されちゃう。

そんなわけで客将となるのはOKしたが、期間は政君の王位が安定するまで。

内容としては政君の護衛ってところかな？

戦争関係には一切手だしは致しません。

内政関係に関しても口は挟みません。

まあ、そんな事言っても政君はこれから王位が安定するまで大変な事になるわけだし？

実は秦国の戦争関連が一番ヤバいのです。

何がやばいって？

秦国には首級制という制度が存在します。

これはどういう事かと言うと、端的に言えば敵さんの首取らなきゃ、いい生活できないよって事。

つまりですね、秦国の身分制度に一番影響を及ぼしているのがこの制度なんです。

尚武の気風の強い国、というか戦場で敵さんの首取らなきゃまともな人間扱いしてもらえない国なんですよ。

ですから、王族、貴族といえども例外なく戦場に駆り立てられざるをえないのです。

まあ、最初から指揮官なので直接剣を揮ったりする様な事はないんですけどね。

つまり政君はほっといても戦争に出て行ってしまいます。

その時についていくかどうかの判断は僕がします。

だってね、孫武さんとか半端じゃなく強いんですよ。

あの人の場合は個人の武も強いけど、兵を率いてる時が一番ヤヴァイ。

おまけに勘ですべてを決定して来るから、作戦の読みようもない。

まあ、他の人に理解できないので戦場では足を引っ張られまくるわけなんですが。

本人単なる戦闘狂ですしね。

ちなみに秦国にいる白起さん、彼女もヤバいです。

まあ、味方ですから一安心なわけですが、彼女は力で作戦を蹴り破るタイプなんです。

もう、究極の力技って感じです。

ひたすら殺せ殺せと連呼しながら敵陣に先頭きって突入していきま

す。

人が漫画のように吹っ飛んでいくんです。

以前彼女の鎧を作る為に戦場に連れて行ってもらった事があります(勿論本陣待機ですよ、怪我したくないじゃないですか)、相手の戦術や陣形、畏その他諸々を見事に力技で粉碎してくれました。

おかげでその国の生き残った兵士は戦闘恐怖症にかかって、子供が持ったおもちゃの剣を見るだけで怯えるようになったとか。

王翦さんはそんな事はありません。

いえ、力で押すのは同じなんですけど、彼女はちゃんと冷静に指揮を出すんです。

状況把握とかの能力が半端ないです。

個人の武としても超一級品です。

彼女に勝てる人は中華全土探してもそうはいないでしょう。

もし彼女が本気でかかってきたら、膠化特製鋼装備をつけていてもかなり厳しいです。

スーパーな人になつたらまず負けます。

弄つてる時に怒るのは本気じゃありませんよ？

あんなの子供の遊びみたいなものです。

まあそれでも生身だと命の危険はあるんですけどね。

攻守のバランスが取れない將軍です。

魏无忌さんは纏めるのが上手いんですよ。

統率力がずば抜けて高いんです。

本人の腕もそれなりなんですけど、武としてはどうにか將軍レベルといった感じですかね。

まあ、人外認定されそうな人達がたくさんいるから仕方ありません。

呉起さんは個人の武も一級品で、統率力も高く、智謀も軍師並みというとんでもない人。

まあ、宰相やつたりしてますし、仕えている国は弱小ですから存分にその力を発揮できてはけません。

まあ、その事で一日中僕に愚痴を言っただけからできたりもしましたけどね……

李牧さんは騎馬の扱いで言えば一番ですね。

辺境の警備についているので、匈奴と戦う日々を送っています。

おかげで騎馬隊を率いた時はとんでもない強さです。

まあ、辺境を動けないので、国内の戦争にはまず駆りだされません。つていうか彼女が辺境警備から外れたら、趙国存亡の危機です。つて事です。

廉頗さんはそんな趙国の大將軍。

残念ながら趙国は辺境警備にまわさなきゃいけない兵が多すぎて、自国の防御で手一杯です。

この人も豪将タイプかな？

まあ、普段はひたすら酒かっくらって、藺相如さんといちゃいちゃしています。

藺相如さん、宰相なんですけどね、廉頗さんの屋敷に入り浸りです。ほんとにこの国大丈夫なんでしょうか？

そういうわけで彼女達の相手をするのは何があるかと御免こうむりたいわけです。

肌を重ねた相手に剣を向けるなんてできませんしね。

ああ、言ってますでしたね。

王翦さん以外の人はそういう仲になってしまいました。

まあ、喰われたって感じですが。

美味しく喰ってください、と思った自分がいたのは否定しません。

考えてみるとあまり軍師タイプの人っていませんよね。

まあ孫武さんの娘さんの孫嬪そんびんちゃんちゃんは間違いなく軍師タイプですが。この子はとても可愛いですよ。

まあ、まだ10歳になったばかりなので恋愛うんぬんではなく、純粹じゆんについて事です。

ただ残念な事に足が不自由なんですよね。

まあ、正史だと刑罰で足を斬られたそうだから、それに比べたらましでしょう。

ちなみに嬪の字ですが、正史では女偏ではなく月でした。とつても頭のいい子です。

孫武さんを確実に止められる、ある意味中華最強。

まあそんなわけで難しい話も終わったので、改めて席を外していたお姉ちゃんを呼び戻します。

ここからはずっと僕のターンですから。

小難しい事はもういいんです。

今日のメインは綺麗なお姉ちゃん達とお酒を飲んで、楽しい夜を過ごす事です！

あ、政君、先に帰るんだったら勘定は済ませておいてね。

第7話（前書き）

まだまだ逝くです。

第7話

第7話

あの後、政君は大部屋で飲んでいた護衛の人達と一緒に帰りました。僕は4大名妓と一緒に楽しい一夜を過ごしました。うん、人生やっぱりこうじゃなくっちゃ。

そんなこんなで夜が明けて。

彼女達とゆっくり別れを惜しんで帰ったのはもうすぐ昼になる時間。お店の前には完全武装の兵士10人。

なんでも今朝出仕しなかったので、不安になった政君に派遣されて……と言うよりは首根っこひっ捕まえて連行しに来たって言った方がいいですね。

だって、その10人率いているの昨日受け取った装備で完全武装した王翦さんなんだもん。

「で、廖化。何かいい残した事はあるか？」

「いやいや、ちょっと待っててくださいよ。なんでいきなり首に金剛刀突きつけられなきゃいけないんですか？しかも殺す気満々？」

「心配するな、骨は拾って……」

「ですからなんで命タマとつたるど状態なんですか。大体今日から出仕するなんて話聞いてませんよ。店の支度だのなんだのあるんですから（まあ、押し付けるだけだから、すぐに終わるんですけどね）

「……チツ」

「だからなんでそんな残念そうな顔で舌打ちするんです。まったく、

そんな事じゃいつまでたつても彼氏なんてできませんよ」

なんか弄られてるような気がするの、弄り返す事にする。

やっぱり僕は弄りキャラの方がいいし、彼女は弄られキャラの方があつていいんだから。

まあ、僕の個人的な意見ですが、異論は認めません。

「か、彼氏ができないのは関係ないだろ。てか、なんでお前の遅参の話から僕の彼氏の話に飛ぶんだよ！」

「いえ、さつき王翦さんが暗黒面に堕ちそうだったので、それを引き留める為ですね。まあ、彼氏の方は……そうだ、今度西施さんを紹介してあげますよ。あれも一応分類上は男ですから。まあ、漢女と言う第三の性別かもしれませんが、そんな事は細かい事です。あれならあなたのそののでたらめな馬鹿力にも余裕で耐えきつてくれます」

「暗黒面ってなんだよ。それに何で紹介するのが漢女なんだ。あんなのと付き合うぐらいだったらそこら辺で適当に男見繕った方がましだ！つか、“あれ”って既に人間扱いですらねえ！」

「まったく注文の多い人ですね。……仕方ありません、廉頗さんを紹介します」

「百合はいやだー！ってなんで彼氏を紹介するって言って出てくるのが人外に百合なんだよ！変おかしいだろ！」

「ええ、可笑しいですね」

「いや、あんたの言ってるおかしいは僕の言ってるおかしいと意味違うから」

「あ、ばれました？」

「ふざけんな、ちつくしょー！そんなに僕を馬鹿にして楽しいのかー！」

「心外ですね、馬鹿になんてした事は一度だつてありませんよ」

「じゃあ、さつきまでの会話はなんだよ！明らかに馬鹿にしてるだ

る！」

「ですから、馬鹿になんてしてませんって。弄ってただけです」

「むきいー!!」

怒りのあまり頭から湯気出し始めた王翦さん。

やかんを乗せたら沸騰するかな？

「くそつ、こんな奴紹介するんじゃないかった。僕の楽しい士官生活
が台無しだよ」

「楽しい士官生活つて、彼氏のできない腹いせに隊の女の子達を侍
らせている事ですか？」

「そんな事してない」

「わかってますとも。ネコじゃなくて夕チが好みなんですよね」

「……王將軍……」

「だから違うってー。見ろ、お前の発言^{せい}でひかれているじゃないか」
周りを見てみると一緒に来ていた10人の女の子兵士が明らかに僕
と王翦さんから遠ざかっていた。

「ああ、冗談ですからあまり気にしないでください。王翦さんだっ
て一応は女の子なんですから、男の子の方が好きな筈です……たぶ
ん」

「そこで一応とか、たぶんとか付け加えるから話がややこしくなる
んだろー!!」

「わかりました。訂正します。王翦さんは男好きです」

「その表現は何か違うー」

まあ、混乱している王翦さんは放っておいて、店の事を弟子達に頼
んでおくとしましよう。

まる投げした？

「H A H A H A、その通りですが、何か問題でも？」

「……というわけで、暫く政君のところでお世話してきます。その間、膠化印の製作は停止しますので、各国関係者には連絡しておいてください。あなた達の仕事は通常通りで構いません。僕が留守の間、責任者は、そうですね……けいか 荊華貴女がやってください。皆は困った事があつたら、荊華に相談するように。荊華は処理できない問題が起こった場合には僕に連絡を入れてください。それではいつてきまず。後の事は頼みましたよ」

「わかりました。気を付けてください」

「ありがとね」

荊華は僕の一番弟子。

青銅鍛冶スキルMAXに限りなく近いので、任せて安全。

めんどくさがりな僕の所為で、帳簿やら職人達との折衝やらすべて押し付けられています。それをしっかりこなせるスーパーウーマンさんです。

なにより美人さんですしね。

難点は胸がさびしい事ぐらいです。

丘陵部どころかまるっきりの平野部なんです。

もう20歳すぎてるのに……

持ち物は勿論鋼造りの膠化専用装備品。

あとは若干の着替えとお金だけです。

鋼装備に関しては見られるのは構わないけど、誰にも作る気はないですよ。

大体箱自体が鋼で出来ている上にパズルのようになってるので、まず僕以外で開ける事なんてできません。

人外な人達でもあけるのに骨が折れるでしょう。

まあ、その代わり中身を入れた総重量が200斤を超えているのですが……

自分で持って歩くのはめんどくさいので、兵士の女の子達に荷車引いて持ってきてもらいます。

王翦さんに一人で持たせるのは、身の危険を感じてやめました。

ぶん投げられても中身が壊れはしませんが、当たった僕は間違いなく壊れるので。

第8話（前書き）

後半かなりシリアス入っています。

第8話

第8話

やってきました、秦国王宮。

これから僕が住むところです。女官さん達も皆さん美人揃いです。これでこそって感じですね。

そうしてここが、これから数年僕が引き籠る場所、太子宮。儲君である政君が住んでいる場所です。

あれ、王になつたら王宮の方に移るから、ここに引き籠りっぱなしって訳には行かないのか。

残念。

まあ、王宮で引き籠り生活堪能できるんなら、それもまたよし。うむむむ。

僕の未来は薔薇色に輝いていますよ。

あっ、そっちの意味の薔薇じゃないですからね。くれぐれも妙な誤解はしないでください。

「で、あなたはどうせまた変な事考えてるんでしょ」

「王翦さん。それは偏見というものですよ。僕はこれからの素晴らしいヒッキー生活に胸を高鳴らせているだけです」

「それが変な事って言うてんのよ……はあ、まあいいや。こっちはなさい。儲君がお待ちかねだから」

「えー、別に今日会わなくてもいいじゃん。どうせ明日の朝には顔合わせなきゃいけないんだし」

「あんたねえ、何しに来たか言ってみなさい！」

「へ？それは勿論王宮に閉じ込められたかわいそうな女官さん達に
真実の愛を伝える為に……って嘘ですからね。その金剛刀は下ろし
てください」

「なんか、あんたを斬った方がこの国平和になるような気がしてき
たわ、主に女性の貞操の為に……と・に・か・く、あんたの役目は
儲君の警護。その他の事をして欲しいなんて高望みはしないから、
それだけはしつかりやってちょうだい」

「……へーい」

「まったく僕もなんだってこんな奴を紹介しようなんて思ったんだ
ろ……そりゃ、強いし頭もいいけど……付き合うこっちは精神が
がりと削られてくし……女官さん達に手を出さないように監視しな
くちゃいけないから、余計な仕事が増えるし……ああっ、もうっ、
これもみんなあんたが悪い！」

「いや、さつきから何をぶつぶつ呟いてるのか知らないけど、いき
なりあんたが悪いって叫んで金剛刀振り上げるってのはどういう了
見ですか？それともその武器没収されたいですか？作る時に言いま
したよね、僕に向けたら壊しますよって。大体まだ代金も払って
らってませんから、厳密に言えばそれはまだ王翦さんの物じゃない
んですよ？」

「……あつ……ご、ごめん。うん、後で必ず払う。いや、今日の夜
までには必ず耳揃えて持つてくから」

「まあ、いいですよ、それで。それにその武器使えるの王翦さんぐ
らしいじゃないからね、没収しても熔かすの面倒ですし」

「と、とかしちゃダメ」

「だから熔かしませんって。一応僕だって自分で作った作品には愛
着があるんですから」

「……うん、ごめん」

「まあ、そんな事はもういいですよ。それよりこれからどうすれば
いいんですか？できれば僕の部屋などに案内してくれると嬉しいん

ですが」

「あー、うん、ちょっと待って。やっぱり先に儲君には挨拶ぐらいしとかないとね。今朝来なかった事でずいぶん心配してたんだから」
「だからそれは別に僕のせいじゃ……はあ、もういいです。それならさっさと政君のところへ案内しやがりください」

「うん、わか……って何その言い方！」

「ああ、別に気にしないでください。ちょっと言ってみただけですんで」

そんな事を話しながら、やってきました儲君執務室。

まあ、やたらと広い部屋ですが、壁一面に竹簡が置かれていたり、地図がかけられていたり、並んでいる机の上にも竹簡が山積みになっていたりする部屋です。

僕が片付ける仕事ではないので、別にかまいませんが。

そこでは、竹簡の山に埋もれた机で政君が一生懸命頑張って仕事していました。

「失礼します。儲君、廖化殿をお連れしました」

王翦さんが僕を扉の前で待たせて中に入ります。

見た目も中身もあれですけど彼女は將軍ですからね、礼儀作法ぐらいはちゃんとできるのですよ。

「そうか、入ってもらいなさい」

なんか偉そうに返事する政君。

いや、実際偉いんですけどね。

でもこういう風に偉そうにしていると、最初見た時に感じた儂げな可愛らしさは影も形もないな。

小さくつても始皇帝って事ですか。
身に纏っている覇気はただものじゃない。
ならばちよつと手助けしてみましようかね。

「やつと来てくれたか、待ちかねたぞ。それでは早速なのだが、私の身边警護は卿に一任する」

「いやいや、いきなり来た人間にそれはまずいでしょう。客将という事なんだし、身边警護は今までどおりでいいんじゃないですか？ 僕はいつも傍らに従っている、という事で」

「……ふむ、卿の言う事にも一理あるが、それでは他の者との意思統一が図れまい。ここは我が親衛隊の副隊長格扱いという事でどうだ？ もつとも卿は自由にやってくれて構わん。私の直接のお願い、ああこの場合は立场上命令の形をとる事になるが、それ以外については一切聞く必要はない。副隊長格というのは、一朝事ある時に指令系統は統一させておかねば余計な混乱が生じるからな、その為の処置という事だ」

「……まあ、それなら」

「すまぬな、無理を言ってきたら」

「まあ、いいですよ。ある程度は予想してましたから。……それよ
り王の具合はどうですか？」

「うむ……おもわしくない。……いや、言葉を濁す必要もないな。
ここ2、3日が山場だろう」

「その後についてはどうなるのですか？」

「私はまだ12歳。おそらく王位についてもお飾りだろう。実権については太后と呂不韋に握られる事になるな。少なくとも3年の間は我慢せざるを得まいよ」

「正式に王としての実権を握るのは3年後って事ですか。まあそれもしょうがないか」

「うむ、弟である長安君・成せいを推す勢力はいまだに強いからな。
ここで宰相と仲違いをするわけにもいかぬ」

「確か、ついでに莊襄王との血縁関係を疑われているんですよ。そんな状況ですんなり王位を継げるんですか？」

「ふんっ、私は間違はなく父王の息子。でなければ父王も私を儲君に立てるまい」

「だからと言って、それを疑われたままじゃあ、いくらなんでも後々まずいでしょう？実際その為に国内の大部分の貴族や將軍は向こうについているわけなんですから」

「長安君など単に王の息子であるだけが取り柄の無能者。あいつには国を治める器などないわっ」

「……だから、現実を見ると言っているんです。擁立する側にしてみれば無能者の方が後々美味い汁が吸えると考えるでしょう。実際向こうの方が勢力は強いんですから、王位継承時に反乱を起こす可能性だって小さくはないですし、成功する可能性だって十分あります。それに対する備えを全くしていませんじゃ、僕は今からでも帰らせてもらいますよ。愚か者の巻き添えになるのはまっぴらごめんですからね」

「……すまぬ、わかっているのだ。私が母と呂不韋の不義の子であると見られているのは……だが、私の父は間違はなく莊襄王ただ一人」

「だから、そう簡単に興奮しなさんなつて。大將軍クラスの人達があっちについているのは政君の血筋が疑われているからだろ？だったら証明できれば十分こっちに引き込む事は可能だと思っけど？」

「だからその証明方法がない以上、どうする事も出来んと言っているのだ！」

「“滴血認親”って聞いた事あります？」

「ん？なんだそれは」

「簡単にいえば双方の血を混ぜる事で血縁関係の有無を調べる方法です。本当に血縁関係にあるならその血は混ざり合いますが、血縁関係にない場合その血は決して混ざり合いません」

「……だが、もし……」

「自信がありませんか？ だったら結構。王位を継ぐなどという考えは捨てた方がいい」

「廖化、言い過ぎだぞ」

「……王翦、構わん。元々こちらが圧倒的に不利な状況にいるのだ。それに私は父王との繋がりを信じている。よかるう。私と父王が行えばいいのか？」

「いえ、それだけでは不十分ですね。莊襄王と長安君、宰相と儲君、莊襄王と儲君、この3つが必要でしょう。莊襄王と長安君はこの方法が間違っていない事を確認する為。宰相と儲君は、宰相と親子関係ではない事を証明する為。最後の莊襄王と儲君は、両者が間違いない親子である事を証明する為。これが可能であればおそらく血筋に疑問を抱いて向こう側についた者達はこちらに取り込めるかと」

「しかし、父王は病身、もう長くはない。子の立場では父王に血を流してくれとは言えぬ」

「ですから、この話を莊襄王に聞かせて差し上げてください。王とて現状を憂いておられると聞き及びます。まず間違いなく承諾してくれるでしょう。元々この方法を言いだすのは王でなくては叶わぬ事なのですから。急いでくださいよ。王が亡くなればこの方法はとれません。死者となつた王に傷をつける事は出来ないのですから」

第8話（後書き）

人物紹介

長安君・成？

政君の異母弟です。

生まれたのが数カ月遅かったので、王位継承権は第2位。
ぶっっちゃけ担ぎあげられるだけの無能な子です。

莊襄王

現秦国王で政君の名義上の父親です。

呂不韋の奇貨居くべし、で居かれた奇貨といった方がわかりやすい
かもしれません。

あまり体の丈夫な人ではなかったので、在位は2、3年です。

次回、滴血認親

今日中に書けるかどうか……

一応頑張ります。

第9話（前書き）

本日の更新は多分これのみ。

いよいよディーン・ジョーエレン・チン滴血認親です。

上手く表現できていればいいんですが。

いや、書いていてもなんか違和感ありまくりだったんで。

第9話

第9話

「父王、折り入ってお願いしたい事がございます」

そういつて政君が莊襄王の寢室に入っていったのは今から四半刻前。その後すぐに、人払いをされたのであろう、太医を含めた部屋の中にいた全員が出てきた。

「なあ、廖化。うまくいくのかな？」

「何言ってる。うまくいかせるんだよ」

「だって、どうやって？あの後調べて、確かに滴血認親って方法は昔っからあるってわかったけどさ、それよりも気にする事があるだろっ？」

「なんの話だ？」

「儲君が本当に莊襄王の血をひいているかどうかだよ！僕だって馬鹿じゃない、いや、馬鹿かもしれないけど、廖化の言った噂ぐらい耳にした事何度もある。当時の状況から考えて儲君が不義の子だって話は説得力があるんだよ。それまで呂不韋のお抱え舞妓だった朱姫様が王様のところにいつてから7ヶ月で子供を産んだんだから。」

誰だってそう考えておかしくはない。王さまだっけ考えた事ぐらいある筈だ、当事者の一人なんだから。それに儲君は朱姫様には似ているけど、王様には似ていない。状況証拠も見た目も2人が親子じゃない可能性が高いって出てるんだ。このまま言ったら間違いなく儲君は王位を継ぐどころか王の血筋を騙った罪で極刑だ。勿論儲君に与している僕らも、宰相派の人達も、朱姫様だっけ例外じゃない」

「そうだろうね。で、そのどこが問題なんだ？」

「ッ……とぼけてる場合じゃないぞ。そんな危ない橋というよりま

ず間違いなく失敗する方法選んで自滅するより、王位継承時の反乱を抑える方法を選ぶべきじゃないのか！」

「（……）はあ。まあ、王翦さんはこの方がらしいと言えらしか。大丈夫、絶対にね」

「だからその根拠を教えろって言ってんだ」

「教えてどうすんの？」

「愚にもつかない根拠だったらこの場でお前を叩つ斬つて、長安君の首をとりにいくっ！」

「大丈夫。今は言えないけど、必ず成功する見込みがあるから提案したんだから。それにこれが一番秦にとって良い方法なんだよ。相手は失敗すると考えるだろうから、妨害工作なんてしてこないだろうし。成功した後で反乱を起こされるにしても向こうにつく兵力は激減するんだから」

「……本当に信じていいのか？」

「ああ、信じてもらって構わない。失敗したら煮るなり焼くなり好きにしてくれ」

まあ、この策で一番の問題となるのは実は長安君ではなく、呂不韋なのだが。

考えてみれば当然の事で、朱姫は勿論呂不韋も政君が誰の子であるか知っている。

元々呂不韋にしてみれば、これは一世一代の国を乗っ取るといって大勝負なのだから。

その為に愛妾であった朱姫を莊襄王に献上したのだ。

今更、実は莊襄王の実子でしたという事にでもなれば、いかに冷静な呂不韋であっても激昂する。

そしてその怒りの矛先は、そのまま騙した相手である朱姫と政君に向かう可能性が高いのだ。

それでもこの方法を使う事を決意したのは、それを覆す方法があるから。

まあ、詐欺というより理科の実験とでも言った方がいいような手法なのだが、少なくともこの時代の人達に見破られるようなものではない。

それでも黙っているのは、万が一聞かれたら、簡単に対処されてしまふようなものだからだ。

そんな事を考えながら、政君を待っていると、寝室に入ってから一刻、やっと話が終わったようだ。

泣き腫らしたのだろうか、少し赤い目を擦りながらそれでも笑顔で告げた。

「父王は御承知下された。手続きの方は卿にすべて任せる」

「りょーかい。んじゃ準備があるから今日はこれで部屋に戻るわ。この後政君が出かけるんだったら、声かけて。王翦さん、部屋まで連れてってくれね？」

「わかった。よろしく頼む。今日はもう出かける事はないとは思いますが、何かあつたら使いの者をよこす」

「そんじゃ僕についてきて。部屋まで案内してあげるから。あ、廖化のあのバカみたいに重い箱も部屋の中に放り込んでおいたけど、問題ない？」

「ん、どのみち部屋に置くつもりだったから問題なし」

そんなわけで政君はそのまま部屋に戻り、僕は王翦さんに部屋まで案内してもらった後、明日のお芝居に必要な小道具を買いに出かけました。

翌日。

ここは秦の王宮、謁見の間。

周りには秦国を代表する王侯貴族や将軍がずらり並んでいます。政君と長安君は左右の最前列に分かれて立っています。

僕は、といえはそんな人達に向かい合って立っています。

なんかやたらめったら視線を感じるんですけど。

まあ、それはこんなところに立っているからしょうがないですが。

視線に殺気が籠っているのはなんとかしてほしいです、切実に。

そのさっきの大部分は味方の筈の政君一派からきているんですけどね。

種明かしのされた手品程つまらないものはないので、何にも言わずに黙っていたのが仇あだになった様です。

ポツと出の新参者をいきなり信用しろとか、無理な事は言いませんけど、せめて僕を信じている政君の事を信じてあげるぐらいはしても罰が当たらないんじゃないですかね。

というか、この人達は政君が莊襄王の子だと思ってないんですかね。少なくとも疑ってはいるんでしょうね。

だったらなんでこっちに味方してんだと、小一時間ばかり問い詰めたい気分です。

あとで政君には家臣をもうちょっとよく選ぶように言っておきましょう。

元々僕がここにいるのも彼らがあまり信用できないから、なんですかね。

政君の目を見るとその可能性は高そうですね。

長安君一派は余裕な顔をしています。

まあ、彼らは政君が莊襄王の血をひいてないと思っ
ていますからね。反乱みたいな事せずとも王位が
転がり込んでくるなら、その方がいいに決ま
っています。

僕を見る目も、どちらかというときよくやっ
てくれたって感じの眼差しですね。

後ろの方にいる人達からは戸惑ったような
視線が投げられています。多分、この人達
は政君が王の血をひいていないと思っ
て長安君に付いたんでしょうね。

終わった後の反応が楽しみです。

そして、呂不韋一派。

呂不韋さんだけは僕の事を射殺さんばかり
の視線を送ってきます。

彼としてはどう考えても不本意な事、では
済まない状況ですからね。この場では
れたら生きてここから出られませんから。

いや、仮にも宰相だし、王の午前で首
チヨンパはないか。

それでも死刑囚用の牢に一直線だろ
うけど。

他の人達は、これまた余裕の表情。

多分、呂不韋さんは政君が自分の息子だ
って事を言っていないんでしょうね。

知らないっていいですよ。

あせらないですみますから。

そして僕がこんなところに立っているのは、
先程莊襄王からご下命があったから。

僕の目の前には机が一つ。

そしてその上には水を張った3つの碗と、
竹筒に入った棒、小さな刃物が4本置
かれています。

「では、これより滴血認親の儀をとり行う。この度の滴血認親に關しては執行人として廖化殿に立つてもらふ事と相成つた。それでは廖化殿、始めてくれ」

「かしこまりました。滴血認親の信憑性を疑う方もこの中にはいらつしやることと思います。そこでまずは莊襄王と長安君に行つていただきます。ご列席の皆様もこのお二方の血縁關係に異議を唱える方はいらつしやらないでしょう。それではまずは、長安君。こちらの碗に血を数滴垂らしてください」

そう言つて長安君を呼びよせ、刃物で指を切り、碗の中に血を数滴垂らしてもらつた。

「それでは続きまして、莊襄王様、畏れ多い事ではございますが、この碗に血を数滴垂らしてください」

莊襄王にも同様に血を垂らしてもらつた。

「それでは皆様こちらの方へおいください。先程垂らした両者の血、こちらの棒でかき混ぜ、混ぜりましたら両者に血のつながりがあるという証拠でございます」

そう言つて棒で2つの血を混ぜ合わせると、何の異常もなく両者の血は混ざり合つた。

見ている人達からも、ほうっという声が漏れる。

「皆様、ご覧いただいたように両者の血は混ざり合いました。これで滴血認親のうち、血縁關係のある両者の血は混ざり合うという事は実証できた事と思ひます。それでは続きまして、皆様がお知りになりたいであろう、宰相と儲君の間の血縁關係を確認してみたいと

思います。それでは呂不韋殿、こちらの碗に血を数滴垂らしてください」

そう言つて呂不韋に碗と刃物を差し出す。

怒りで今にも噴火しそうな中、目を閉じ、ええいままよ、とばかりに指を切つて血を垂らす呂不韋。

さすがに衆目監視の中、断る事はいくら宰相でも出来ないからね。断つたら噂が事実だと認める事になるんだから。

「それでは続きまして、儲君もこの碗に血を数滴垂らしてください」
さすがに覚悟を決めたのか、迷いなくすっぱりと指を切つて血を垂らす政君。

「先程の棒には莊襄王と長安君の血がついている為、こちらに用意した別の棒でかき混ぜさせていただきます。それでは、皆様ご覧ください」

そう言つて先程と同じように棒で2つの血を混ぜ合わせる……

「こ、これは！」

「ば、ばかな」

誰かが叫んだ。

混ぜ合わせた血は、一体とはならず、ところどころにダムを作っていた。

「皆様ご覧ください。両者の血は混ざり合わず、ダムを作る結果となりました。これで両者に血縁関係がないという事を実証できたと思います。それでは最後に、莊襄王と儲君の血縁関係について確認をとりたいと思います。まずは儲君、この碗の中に先程と同じように血を垂らしてください」

先程の結果に気を良くしたようだが、それでも少し不安げな顔で政君が最後の碗に血を垂らす。

呂不韋と血がつながっていない事よりも、王の血をひいているかどうか問題ですからね。

これでどっかで朱姫が浮気してできた子供だったらシャレになりませんし。

「それでは莊襄王様、申し訳ございませんが、もう一度こちらの碗に血を数滴垂らしていただけますか」

莊襄王にも先程と同じように数滴血を垂らしてもらおう。

「さて皆様、それではこの血が混ざり合わさるかどうかの確認をお願いいたします」

そう言って、最後の棒を取り出し、両者の血を混ぜ合わせる。

「……………」

「……………?」

2つの血は、勿論ダムを作って反発する事なく混ざり合う。

見つめていた者の多くからは失望の溜息。

おそらくこれは長安君の一派のうち、積極的に長安君を擁立しよう

としていた者達。

そしてその次に多かつたのは安堵の吐息。

莊襄王、儲君一派、呂不韋一派、そして儲君の血統に疑いを持って長安君についていた者のものだろう。

そして、怒りのあまり真つ赤だった顔を青白くさせて震える呂不韋。長年かけて練った計画が、水の泡と消えたと知った絶望。

まんまと騙されて12年もの間はしゃいでいた自分に対する侮蔑の念。

そして一番大きいのは朱姫と政君に対する殺意。

ありとあらゆる負の感情が凝り固まって人の形をなした存在。

それが僕から見た今の呂不韋の姿。

「これにて、滴血認親の儀は滞りなく終了し、莊襄王と儲君の血縁関係は証明されました。皆様方にはこの事の証人となっていただきます。これ以降、根も葉もない噂に踊らされ莊襄王、王妃、儲君、宰相殿を侮辱する事のないようお願いいたします」

そう言つて、莊襄王に頭を下げ、使った小道具を持って退室する。

後ろの方でがやがや何か言っているが、とりあえず僕のやるべき事はすべて滞りなくやり終えた。

長安君の一派ががたがた言おうが、既に王と儲君の血縁関係が証明されたとあっては勢いもないし、血縁関係を疑っていた人達もついでこない。

こんな居心地の悪いところからはさっさと逃げ出すに限る。

王翦さんも何か言いたそうだが、放っておいていいだろう。

どうせあとで他の人にも説明しなきゃいけないから、めんどくさい

事は一度にまとめて済ませたい。

ああ、肩こった……

やっぱなれない言葉使つと肩こるよね。

あとは……

呂不韋のおっさんをどうにかしないといけないんだよな。

取り敢えず、事前に打ち合わせていた通り、朱姫と政君には太子宮の儲君執務室に集まってもらおう。

どうせおっさんの事だから頭から湯気出して乗り込んでくるだろう。別に朱姫が殺されるのは構わないが、それでも一応は政君の母親を見殺しにしたとあつては、さすがにまずい。

それに数が減つたとはいえ、長安君一派ははまだ朝野の過半数を占めている。

それに対抗する為には、今はまだ呂不韋の権勢に頼るしかないのだ。

はあ、めんどくさ。

やっぱ余計な事に首を突っ込むべきじゃなかったな。

この後三日三晩は星沁楼に居続けでも罰は当たらないだろう。

取り敢えずおっさんが乗り込んでくる前に適当に腹ごしらえでもするか。

その辺にいた女官さんを捕まえて軽い食事を用意してもらおう。

いや、メインディッシュは君だ！なんて事はしませんよ？

おっさんが乗り込んでくるまで、さすがに一戦交える時間はないからね。

そのあたりは星沁楼で……

話がいっきりに逸れてしまった。

あともうちょっとだけ真面目な顔しておかないと。

さすがに普段の調子で、呂不韋にあつたらぶつ殺されそうだし。早いとこ俗世の煩わしい瑣末事から逃れて、楽園に行きたいし。

あとちょっと頑張りますか。

第9話（後書き）

メインほっぽとくわけにもいかないんで、一気に更新はここまでとなりませう。

次の更新はまた煮詰まった時ですね。

まあ、メインよりこちらの方が伸びがいいので複雑な気分です。

頑張つて頭ひねつた方が評価下がるって……

下手の考え休むに似たり？

案ずるより産むがやすし？

それはともかく。

皆様、応援ありがとうございます。

第10話（前書き）

やっぱりこっちの方が書きやすい……

メインの方は一文字も書けていないのに、こっちの方はなんかえらい勢いで書けてます。

いつその事先にこっちを第一部まで終わらせてしまおうか……

なんて事を考えるバカが書いた恋姫世界の物語。

それでは、どうぞご覧ください。

って、息抜き小説4日連続投稿って……何やってんだろ……

第10話

第10話

「りよーかーっ！」

儲君執務室でのんびりお茶をすすって皆の帰りを待っていた僕の耳に飛び込んできたのは、王翦さんの雄叫び……じゃなくて僕を呼ぶ声。

アフオツ娘ヴォイスのあの人を思い浮かべてしまった僕は悪くない、と思う。

粉碎しようともしたのか、体当たりで儲君執務室の扉を破砕し、そのままの勢いで王翦さんがぶちかましをかけてくる……って、ちよっと待って。

慣れない口調で話していたので疲れていた僕は、いつものまったりモードに突入していたせいで回避行動に移るのが遅れてしまい、もろに食らってしまった。

ピンポン玉のように勢いよく弾き飛ばされ壁に激突して半ばめり込むような形で静止。

弾き飛ばした当の本人も勢い余って書棚に激突、竹簡の山に埋もれてしまった。

えー、この状況をどうすればいいんでしょうか……

その後、入ってきた朱姫と政君に驚かれた事は言うまでもない。

近くを巡回していた兵士を呼んでもらって、なんとか壁の嵌め込み
絵状態から脱出& a m p ;王翦さんを掘り出した。

幸せそうに気絶している王翦さんに目覚めのキス……地面への熱い
キスをしてもらって無理やり叩き起こす。

女の子の扱いじゃないとか文句を言ってきたが、傷一つついていな
いから別に問題はないだろう。

というか、鼻血一つ流さずに平然としている王翦さんも大概だと思
う。

かなり人間離れしてきたと思うが、決して僕の所為じゃない。

たぶん、アレだ。

彼女は漢女と対になる第4の人種に目覚め……

いや、彼女の名誉の為に言うまい。

つか、言ったら間違いなくスーパーな人に殺される。

今でも僕の思考を察知したのか、こっちの方を睨んできているんだ
から。

先程朝野で感じた殺気が兇戯に等しいぐらいの圧力を感じる……

そんな感じでドタバタしていたので、呂不韋のおっさんが来る前に
打ち合わせしておこうと思った時間は全部つぶれてしまった。

政君には昨日のうちに簡単な説明をしてあるので、多分取り乱した
りはしないだろう。

他の2人は……なんにも知りませんよ。

だからちよつとだけでも説明しておきたかったんですけどね。

特に王翦さんが暴走するとマジで命が危ないから。

仕方ないので、話に説得力を出す為の驚き役になってもらいましょ
う。

予想通りに頭から湯気出して鬼のような形相で乗り込んでくるおっ
さん。

室内にいる僕と王翦さんを気にする事もなく、朱姫と政君に剣を振り上げ……王翦さんにあつという間に無力化されて簀巻きになって転がっている。

ご丁寧にさるぐつわまで咬まされているので、真っ赤な顔でうーうー唸っているが見た目が滑稽すぎてまるで迫力が無い。

なんか妙に王翦さんの縛りあげる手際がいいと感じたのは気のせいだろうか？

ひょっとしたらどこかで隊の女の子相手に練習でも……

殺気を隠そうともせず縄を持った王翦さんが近づいてきたので、危険な念頭を振り払う。

おっさんとはもかく、僕に縛られて喜ぶような特殊な趣味の持ち合わせはないっ！

「呂不韋殿がこちらに来られた理由はわかっています。騙された報復に来たのですよね」

おっさんの傍にしゃがんで、話しかける。

まあ、乗り込んでくるのは予想してましたしね。

いきなり殺そうとするほど短慮を起こしたのは予想外でしたし、王翦さんに簀巻きにされるなんて想定すらしませんでした。とりあえず本筋に影響が出るほどではありません。

あとはこのおっさんを丸めこめばいいんですから。

その為に必要なものは、やっぱり滴血認親なんです。

あれを信じたからこそ、こういう状況になっているんですから。

うーうー言いながら睨んできますが別に怖くありませんよ。

簀巻きにされて手も足も出ないおっさんを怖がってちゃ世の中渡っていきませんかからね。

それがたとえ、秦国一の権臣でも。

「あのですね、ああいう事をしたのは単に儲君の王位継承をスムーズにいかせたかっただけなんです。だから当然どのような状況であってもあの結果が出せるように細工させてもらっています。だいたいいんな事で血の繋がりがわかるのなら、今までどこもやってなかった方がおかしいですよ。まあ、一応文献には載っていますかね、あれだつて信じれるかどうかなんて知れたもんじゃない。そう言ってもたぶん信じられないでしょうから、なんだつたらここでもう一回やってみますか？今度はしっかり混ざり合う事を保障してあげますよ」

そう言つて小刀をとりだして、有無を言わせず（まあ、さるぐつわしてるんで言えないんですが）採血。同様に政君にも血を垂らしてもらつた。

そして懐から棒を取り出しかき混ぜると……

「こ、これは!?!」

「嘘、なんで……」

「むー。むー、むー」

朱姫、王翦さん、おっさん、三者三様に驚いてくれた。

ちなみに政君は驚いてません。

ここで混乱されては困るので、昨夜のうちに説明しておいたんですから。

ちなみにその時は僕と政君の血でやってみました。

大広間で驚いていたのは勿論演技ですよ。

「見ましたか？さつきと同じようにやったのに今度は混ざりましたよね。こんな方法なんて全く信用できないんですよ。ちょっと手を加えれば混ざり合わせる事もその逆も簡単なんですから」

そう言つて碗の中身を捨てる。

「まあ、種明かしとしましては、かき混ぜた棒にちよつと細工してあるんですよ。その細工した棒でかき混ぜたから王の御前でやった時には混ざりませんでし、使わなかった今回はちゃんと混ざりました。ああ、細工の内容については言いませんよ。他の人にばれなくても困りますしね」

「なんでわざわざそのような事を……」

「朱姫様。よくお考えください。現在儲君の勢力は一割にも足りません。呂不韋殿の勢力と合わせたところで四割がいいところです。朝野では長安君一派が圧倒的多数を占めているんですよ。それでも勝てるかもしれませんが、秦国は疲弊してしまいます。それでは他国のいい餌食になってしまうので、このような手段をとらせていただきます。少なくとも血筋を理由に長安君についていた者達はこちらに取り込めるでしょうし、向こうの大義名分も失われた事によつて軽拳妄動はできなくなりました。あとは儲君が王位を継承すれば逆転させたその差を更に広げられるでしょう。利益に群がっただけの小物なら利益が得られないとなればこつちがわざわざ声をかけなくても勝手に離反していきますからね。それでも長安君は担ぎあげられたまま残るでしょうし、その周囲の人達も今更こちらにはつけないでしょうけど、その程度の相手なら大した損害も受けずに事を済ませられます。秦国にとつても国を2つに割る様な争いをしないで済むんだからいい事づくめじゃないですか」

その言葉を聞いて朱姫様は黙ってしまった。

未だにむーむー言ってる可愛くないおっさんも思うところがあつたのか、随分おとなしくなつた。

ちよつとでも冷静に考えてくれればすぐにわかる話なんですけどね。少なくとも政君が王位継承しなければ、ここにいる人達は（あ、僕は関係ないですよ）良くて追放悪ければ後腐れのない様に首がポロツ、なんて事もあり得るのですから。

まあ、政君とおっさんは間違ひなくポロツの立場ですけどね。

死にたくないなら相手を嵌めて騙して蹴落とすんです。

権力闘争なんてまじめにやったらバカをみるだけなんです。

生き残つた者勝ちの世界なんですから。

まあ、頭に血が上つてたおっさんはまともな思考能力なんて残つてなかつたでしょうし、朱姫に至つては絶世といつても差し支えのない美女だけど頭の中身は空っぽですからね、期待するだけ無駄でしたね。

まあ、取り敢えず納得はしていないけど理解は出来たようなので、馬鹿2人には下がってもらいます。

こつちはこれから政君と大事な話をしなければいけませんからね。

王翦さんはこれから隊の訓練があるので誘いません。

というか、戦事にかけては天才と言つてもいい娘だけど、謀り事に關してはまったく頼りになりませんからね。

王翦さんには戦場で頑張ってもらいます。

長安君一派だつて数が減つたところでそのまま解散するわけじゃないのですから、最後には力づくで解決するしかないのですし。

儲君執務室は扉が壊されて壁には人形ひとがた、綺麗に並べてあつた竹簡は床に散乱していると聞いたひどい有様なので、取り敢えず人を呼んで修繕・整理をしてもらう事にします。

政君と話をする為にやってきたのは馬場。

周りに人が来ればすぐわかるので、盗み聞きされる心配はありません。

「政君、先程の芝居について何か聞きたい事はありますか？」

「聞きたい事ならば山ほどある、が今は聞くまい。どうせ答えなど返ってこぬのだからな。……だがこれだけは教えてくれ。私の本当の父親は一体どちらなのだ？父王か？それとも呂不韋か？」

「その問いに答えられる者はおそらくこの世にはいないでしょう。」

貴方も知つての通り朱姫は莊襄王の下にいつてから7ヶ月余りで貴方を産み落としました。多少早いですが、早産と考える事も出来ませし、呂不韋のところにはいた時に既に身籠つていたと考える事も出来ませ。産んだ当の本人である朱木ですら知っているかどうか。それにそれを聞いて貴方はなんとなさるのですか？呂不韋が父だったとしたらそのまま国政を壟断させ、彼の思うがままにさせるとでもいうのですか？貴方が昨日言つたわが父は莊襄王ただ一人というあの言葉は、あの思いは、嘘だったとでも言うのですか？」

「……すまん、確かにその通りだ。例え父親がどうあれ、私が父と思い慕うは父王ただ一人。呂不韋など例え真実がどうあれ家臣にすぎぬのにな」

まったく、頼みますよ。

政君がこんなところで悩んでちゃあ、これから先不安になるじゃないですか。

政君が実権を握る為には、遅かれ早かれあのおっさんを舞台から引

きずり下ろさないといけないんですから。

これでぐらつくようだったら、尻に帆を掛けてとつと逃げ出そう
と思つてたんですけどね。

そんなやわな人にこの先何年も命を預ける気にはなれませんし。

覚悟が決まつた様ですから良しときましましょう。

「さて政君、あなたはこれからの展開についてどうお考えですか？」

「……王位継承してもしばらくの間は呂不韋の傀儡かいらいとなるであろう。
朝野には出れるだろうが、単なるお飾り。発言権すらあるまい。お
そらく母上が後見人、呂不韋が宰相として全権を握るのであるう。
そのくせ責任だけはとらねばならぬ」

「そんな事は今更言うまでもありません。僕が訊いているのはそれ
を打破する為の行動について何か考えているかどうかです。今回の
ような献策は今後しません。元々僕の役職は単なる護衛であつて、
政君の軍師になつたつもりはないですから。僕からの献策はこれっ
きりと思つて、後は自分で考えるなり、幕僚の知恵を借りるなりし
てください。言つときますけど、例え単なる護衛としての客將だと
しても、能無しについていく気はありませんからね。見限られたく
なかつたら、絶えず努力し、結果を出し続けなさい。見限つてほし
いのでしたら、そんな事はしなくてもいいですよ？僕も元の店に戻
つて毎日面白おかしく暮らしていきますから」

実際、今から抜けれるんなら是非ともそうしたい。

今更言つても無理だろう事はわかつてる。

あんな助言までして政君の王位継承の手助けしちやつたんだから。
でも、だからこそ、政君に覇者足り得る器量を見せてほしい。

そうじゃなきや女の子との甘い生活を先延ばしにしてまでここに
いる意味がない。

まだ12歳の子供にとってきつい事を言っているのは百も承知。て言うか、たとえ12歳だろうと一国の王になるんだから甘えてもらっては困る。

今回の献策は、僕にとってはこれから仕える相手への手土産みたいなものなんだから。

あとはごく普通の護衛役で十分。

これ以上手を出すと、あっちこっちでエライ事になりそうだし。

取り敢えず釘さしといたから、後はのんびりできるといいなあ。

政君を暗殺から守る為に、鉄製のフルプレートアーマーでも使ってあげようかな。

さすがに鋼製は無理だけど。

それですむんならこんな苦勞はしてないか……

第10話（後書き）

そんなわけで、取り敢えず滴血認親は終了です。

種明かしとしては、棒になんか薬を塗っておいた、ぐらいに思ってください。

作者的にはお酢を塗っておきたかったんだけど、酢で血が固まるかどうかの確認が取れなかったので、詳しく書けませんでした。

なんか王翦さんがどんどん壊れてきています。

こんな予定じゃなかったんですよ。

もつとまじめな女の子の筈だったんですよ。

間違っても第4の性別がどうのなんて設定はなかったのですよ？

一応ヒロイン候補なんですから……

つか設定が頭の中で即興で増えていくこと自体がまずいんですけど

……

しょうがないですよね。

脳内妄想そのまま文章にしているんですから。

ところでこの小説、恋姫原作ってタグ打ってていいんでしょうか？

世界観が恋姫ってだけです。

原作キャラなんて影も形も出ていません。

まあ、ご先祖様は出ていますが……

いえね、メッセージで恋姫と思って読んだら全然違うじゃないかとクレーム来たもので、このまま書きすすめていいのかがどうか悩んでいます。

率直な意見をお聞かせくだされば幸いです。

評価してくださる方へ。

感想で評価の理由をお書きいただければ嬉しいです。
改善点などがあったらどしどしお知らせください。

第11話(前書き)

そして懲りずにまた投稿。

第11話

第11話

甘かった……

ハバネロが口直しにもならないくらい甘かった……

そりゃあね、無事に王位継承できましたよ。

僕があれだけお膳立してあげただし。

呂不韋さんも全面的に手伝ってくれてるし。

日和見ひよりみしていた人達もこっちについたから、長安君の勢力は激減してたし。

なんの問題もありませんでしたよ。

だから思ってしまったわけですよ。

このまま、政君が実権を手に入れるまでのんびりできるかなって。

だってそうでしょ。

呂不韋のおっさんは宰相としてだけではなく、仲父ちちうはって政君から呼ばれるようになったからいい関係を築けてるし。

秦軍の首脳、上將軍3名、大將軍5名のうち向こうについたのは大將軍1人だけだし。

朱姫と呂不韋は往年の恋が再発したのか楽しそうにしているし。

まあ、呂不韋さんの方は年なのか、時折辛そうですけど。

政君も李斯しさんとかいろんな人材集めて一生懸命勉強してるし。なんの問題もないと思っただよ。

うん、長安君一派の馬鹿さ加減を甘く見過ぎてました。

まさか自暴自棄になって反乱をおこしてくるとは……

兵力的にも勢力的にも既にこっちの方が上回ってるんだよ？
せめていろいろ手を打つとか考えないの？

まあ、そんな事されたら厄介な事になるんだけどさ。

その時間を考えて、3年ぐらいはかかるだろうと踏んでただけど
さ……

まさか私兵のみを率いて、たった半年で反乱をおこすなんて……

大量自殺志願者としか思えませんよ？

それで政君も朝野の反対を押し切って、自分で兵を率いて平定する
とか言い出すし。

あ、もう王様だから政君じゃまずいか、秦王政もしくは大王って呼
ばないと……

でも即位したって言うてもいまんとこお飾りだしね。

人目のあるところで言うてるわけじゃないから、大丈夫でしょ。

長安君と、政君の叔父にあたる高陽君その他数名の親族、後は若干
の中小貴族とその私兵。

どこかの国と手を結ぶわけでもなく、宮中に内応者がいるわけでも
ない。

どっからどう見ても勝てないのにわざわざ死にに来るんですよ。

そりゃあね、死にに来るのはそっちの勝手ですよ。

でも死にたいなら1人で自殺でも何でもしてほしいです。

周りの人を勝ち目のない戦いに巻き込まないでほしいです。

おかげで政君が戦場へ行く気になっちゃたじゃないですか。

ついていきたくないんですけどね。

半年ばかり何にも仕事してないから、周りの目が痛いんですよ。

傍から見たら、ただ政君の傍らにぬぼーっと立っているだけですからね。
いくら護衛のみの約束、戦場での護衛については僕に決定権があると言っても、そう簡単に納得できるものじゃないみたいです。

政君の気持ちもわかりますよ。

長安君や高陽君、他にも親族が数名いるのですから、他の人が行っても処罰なんてできないじゃないですか。

反乱を起こしたといっても、彼らは秦王家に連なる人達なんですから。

そりゃあ、他の人が勝手に首なんて取れませんよ。

いくら生死を問わず、と言ってもそう簡単に王族を殺す事なんてできないですよ。

別に生け捕りにして引っ立ててくればいいと思うんですけどね。
やっぱり、王家の者だけに手加減してしまう可能性はあるわけですよ。

普通に戦ったら殺してしまう可能性の方が高いんですから。
戦場で確実に生け捕りにできるかどうかなんてわかりませんからね。

そんなわけで、政君出陣。

周りの視線が痛いので、僕もついていく事と相成りました。

まあ、戦場とは言っても政君が自分で剣持って突撃するわけじゃないから安心です。

さすがに一国の王が前線に立って突撃とかはしませんよ。

この戦いで政君に求められるのは本陣でじっとしている事。

自分の親族の死に対する責任をとる為に来ているんですから、当然です。

っていうか、王様が部下の仕事とっちゃいけません。

そして僕の役目はその政君の護衛。

将も兵もこつちの方が質量ともに上回っていますから、まず滅多な事にはならないでしょう。

まあ、それでも全力で遠慮したかったんですがね。

考えてみてください。

圧倒的劣勢において出来る事なんて限られています。

彼らがとってくる手段はおそらく少数精鋭による政君の暗殺。

軍の統率者が王なのですから、効果は抜群ですからね。

元々政君を倒せば向ここの勝ちなんですから。

そんなわけで僕も勿論フル装備ですよ。

ただこの装備、評判がえらく悪いです。

西洋甲冑みたいな物、と言つかまんまその物ですから、見た目からして異質ですし。

顔も見えないフルフェイスの兜。

指の先から足の爪先まで全身くまなく覆っているフルプレートアーマー。

腰には僕の傑作なんちゃって日本刀。

そして右手に携えているのは、芯に鋼棒を通した豪槍蜻蛉切。

そして、その装備すべてが黒く塗られています。

ちなみに秦軍の基本装備では、兜や籠手をつけている人すらあまりいません。

つけていてもせいぜい布に青銅の板をくっつけたような物。

大した防御力の期待できる代物でない事だけは確かです。

そんな中で真っ黒な鋼で一分の隙もなく覆われている僕。

……ちょっと恥ずかしいですね。

もうちょっと簡単な装備を考えた方がいいかもしれません。

武器はこれでもいいのですが、せめて防具は変えた方がよさそうです。

国王より護衛の方が防御力高いのは、見た目的にもどうかと思いませんし。

ちなみに政君の装備はごく普通の鎧です。

只今絶賛成長中なので、すぐ防具が合わなくなるんです。

王様が鎖帷子くさりかたびらっていうのも、見た目あんまりよくないですね。

そんなわけで政君専用防具は、ある程度育つまでは製作中止になりました。

そんならちもない事を考えていると、いつの間にやら周囲が騒がしくなった。

まだ戦場に着くには早すぎる……という事は、やっぱり暗殺部隊の奇襲か。

少数精鋭部隊での奇襲というには随分数が多いですけど。

こっちは王翦さんがいますからね。

敵が襲ってきたので、取り敢えず政君を馬車の中に押し込みます。

政君の身の安全を確保する為の特別製の馬車です。

骨組はすべて青銅製、というか馬車の本体総青銅製。

窓も何もなく、扉を閉めれば中からしか開けられない。

まさに移動するシェルター！

まあ、総青銅製なのでとても重く、馬4頭で引かなきゃいけないのが唯一の問題点ですが、頑丈さは折り紙つきです。

完全武装の兵隊百人乗ってもびくともしませんし、熊に殴らせてもへこみません。

残念ながら、出来を確かめるとほざいた王翦さんの馬鹿力で殴られて、一度ベコベコになりましたが。扉もゆがんで開かなくなっちゃいましたし。

出来を確かめる為と言って中に入ってもらった兵士さんは……失神してました。

可愛い女の子だったのに、失禁もしてました。当分、嫁の貰い手がないと言って泣きつかれたのは別の話です。勿論王翦さんにまる投げしました。

その後どうなったのかはよく知りませんが。しばらくの間王翦さんが元気がなかった事だけはわかっています。

ちなみにこの馬車、僕の一番弟子、荊華の自信作です。王翦さんが壊した時には泣きながら修理していました。

直った時には更に頑丈になっていました。

そんなわけでたとえ槍が降ろうが岩が降ろうがびくともしません。

王翦さんがスパーになつたらわかりませんが。

普通に一刀両断とかやりそうですからね、あの人。

できれば僕も中に潜り込みたいところですが、残念ながらこれは一人用。

僕の入るスペースはありません。

本来は2、3人用でしたが、王翦さんにも壊せないようにと頑張った結果、やたらめつたら壁が分厚くなって、人の入るスペースがなくなつたんです。

ほっといたら人一人入れなくなるところでした。

そこまでくると、もう単なる青銅の塊なので自重させましたが。

多重構造にして間に綿などを挟んであるので、衝撃にも強いですよ。

確か、始皇帝時代に行幸やってたら大岩に押しつぶされたって逸話もありましたからね。

そんなわけで、政君の身の安全だけはきっちりバッチリ保障されています。

まあ、長時間閉じ込めといたら息出来なくて死ぬでしょうが。

空気穴なんてついてませんからね。

設計のミスではないですよ。

元々一時避難用の移動シェルターですから、長時間閉じこもる事は想定していません。

箱入り息子と化した政君は、今のところとっても安全。

だから僕に出来る事といえば馬車の横にぼーっと立つて……痛いです王翦さん、戦いながら金剛刀で頭殴るのやめてください。

いくら外側が鋼造りとはいえ、中身は生ものなんですから。

やる気もなしにつっ立っていたのがお気に召さなかったようで、襲いかかる敵を打ち倒しながらもその合間合間に器用に僕の頭を殴ってくる。

僕がやらなくても王翦さん1人で十分そうなんですけどね。

だってそうでしょ。

目の前に群がった敵を倒しながら、馬車の前に立ってる僕を殴る余裕があるんですから。

合いの手みたいなきで殴ってくるんですよ。

「りょー、かつ、あんたも、ちつとは、働き、なさいよ。単なる、無駄飯、ぐらいじゃ、ない！」

「いえ、一応政君の引き籠ってる馬車の護衛をしますけど？」

「僕が、殴っても、壊れない、ような、物の、護衛、なんて、必要、

ない、でしょ！」

「んー、あんまり危ない事したくないですよね」

「そんな、恰好、してて、危ない、わけ、ない、でしょ。いい、から、とつとつと、倒して、こいつー！」

さすがにこれ以上殴られると身の危険を感じるので、素直に従う事にした。

さすが鋼装備、王翦さんの馬鹿力で殴られてるのに殆ど傷も付きません。

でも、衝撃を全部吸収してくれるわけではないので、ある程度以上の力で殴られると痛いんです。

今度、改良しなければいけませんね。

とはいっても、周りの敵は殆ど王翦さんや兵達で片付け終わってるんですよ。

王の護衛という事で腕利き揃いですから。

そんな事を考えながらあたりを見回していると、とんでもない物を発見してしまった。

あれって……ゴルディオンクラッシャー？

いや、この時代に勇者王はいないんですけどね。

金色でもありませんし。

めったやたらでかい鎚を（おそらく青銅製だろう）振りかざして、どうやったのか知らないけどこちらの方に文字通り飛び込んでくる大男。

前面の敵に集中しているのか、他の人達は気づいていない。

これって、僕が相手をしろって事ですかね？

馬車本体よりも巨大な青銅鎚、さすがにあれを全力でぶち当てられたらちよつとまずいかもしれない。

防ごうとしたがあまりの非常識さに思考が一時停止してしまったので、ぎりぎり……間に合いませんでした。

轟音をたてて馬車の天蓋にぶち当たる鎗。

あまりの衝撃に車軸が折れ、車輪も弾け飛び、馬車を覆っていた装飾も吹き飛んでそのまま地面にめり込む青銅の四角い箱と、荷重に耐え切れずに潰れる馬。

青ざめる王翦さんや護衛の兵達。

歓声をあげ、士気の上がる暗殺？部隊。

第11話（後書き）

仲父

ほぼ父親と同義です。

王翦さん、無双です。

廖化君はやる気ゼロです。

作者はライフゼロです。

第12話(前書き)

今週いっぱいはこちらを更新しようかな、と思っています。

そのあとは……まあ、ぼちぼちぬるぬると更新していきます。

第12話

第12話

パニックっている王翦さんや兵隊さん達はおいといて。

「廖元検、参ります」

取り敢えず、奇襲が成功して喜びで周囲への警戒心が薄れている敵さんを、手当たり次第に蜻蛉切りでぶん殴ります。

え？槍の使い方が違う？

いいんです、槍っていうのは基本的に切れ味鋭い鈍器なんです。少なくとも僕が使用する時はそうなんです。

十数人ぶん殴ったところでフリーズしていた王翦さん復活。

他の兵士さん達に馬車の周りを固めさせて、金剛刀で片っ端から撫で斬りにしていきます。

彼女は気を使う事にも長けているので、刀の先から衝撃波が飛びまくってます。

多少距離が離れていてもものともせず、周囲に血の雨を降らせていきます。

元々残っていたのが数十人しかいなかった事もあって、殆どあつという間に決着がつかしました。

それなりの腕利きではありましたが、それはあくまで奇襲に特化していましたから、正面きつての戦いになると王翦さんは勿論僕にも楽勝の相手でした。

周囲の敵を一掃した後で、馬車に近づく僕と王翦さん。

残った兵の皆さんの力も借りて、地面にめり込んでいる巨大な青銅の塊を掘り出します。

さすがに多少傷はついていましたが、壊れてはいないので中身の政君は無事の筈です。

筈なんです……

いつまでたつても出てきてくれません。

どうやら気絶でもしているようですね。

多重構造にして、綿も敷き詰めてあるとはいえ、先程の殴った衝撃・轟音はちよっときつかったようです。

ほっといたら死んでしまうのですが、中からしか開けられない扉なのでどうしようもありません。

「王翦さん、すいませんが、叩つ斬ってください」

荊華には悪いですが、壊すしか方法はありません。

まあ、薄皮を削ぐように斬っていけば政君ごと真つ二つ、なんて事にはならないでしょう。

多重構造にしている分、一枚板よりは斬りやすい筈ですし。綿が入っていても、綿ごと斬り裂けるのだったら問題はあんまりないでしょう。

「お前がやれ、お前が。膠化だっていい刀持ってるじゃないか」

まあ、さっき言った事も嘘ではない。
どっちかっていうと刀の扱いは得意じゃないのだ。

一枚斬ればいいわけではないので、何度も同じ個所から斬りつける事になる。

確かに一枚ごとの厚さは多重構造の為それほどではないが、間に綿が入ったりなんだりとかかなり斬り難くもなっている。

僕の気の使い方は、元々このくそ重たい甲冑の為に鍛錬したもので肉体強化がメイン。

というかそれ以外は使えない。

王翦さんみたいに得物に気を纏わせて斬れ味を上げたり斬撃を飛ばしたりなんて真似は出来ないのである。

で、どうしてこんな事言うかというところ……僕の刀の使い方は力任せに斬りつける、というより殴りつけると言った方が正しいような使い方。

それでも戦闘で何とかなるのは、気で身体能力を強化してあるおかげで、相手との基本能力の差が大きいから。

たぶん身体能力が同じ状態で同じ得物を使ったとしたら、親衛隊の女の子達にも勝てないだろう。

向こうは刀を振るのが本職なのだから、技術的には勝ち目がないからね。

つまり王翦さんみたいに気も使える戦闘民族な人相手だと分が悪い。それでも何とかなるのは、それしかできない肉体強化が飛びぬけているから。

まあ、それでもスーパー状態にはかなわないんですが。

だから僕は刀の扱いが得意じゃない。

元々勢いで作っちゃただけで、自分に扱えるかどうかなんて考えもしてなかったんだから、当然の事ではある。

まあ、鋼造りなので、鈍器としても使える事だけが救いである。普通の鎧だったら刀の斬れ味のみで、硬い物でも大概は力任せに斬り裂けるしね。

結果、どうなるかというと……

「ああ、もういい、わかった、やめる廖化。お前に任せていると大王様が生きているうちに箱から出る事は不可能だ」

角の部分を力任せに叩き斬り、出来た隙間に刀を突っ込んで梃子の要領で隙間を広げ、一枚一枚力技で外していく作業をしていた僕に王翦さんが呆れたように声をかける。

「まったく、お前は本当に刀の使い方はなっちゃいないな。貸してみろ、刀なんて物はこうやってこうやれば簡単に斬れるものなんだよ」

王翦さんが僕から受け取った刀を揮うと、スカンスカンと青銅を斬っているとは思えないような音を立てて、箱が端の方から輪切りにされていく。

あれ？確か王翦さんの馬鹿力でも壊れないように設計した筈なのに

……

「ああ、殴るのと斬るのはまったく違うからな。そんな事言ったらお前だつて一応まがりなりにもそれなりにちよつとは斬る事が出来てたじゃないか。それにしても斬れ味いいな、これ。どうせまともに使えないんだから、僕に譲ってくれない？」

「……なんか、随分棘があるような気がするの、は気のせいですかね。あと、その刀は譲りませんよ」

「……ああ悪い悪い。戦ったばっかだからまだ気が高ぶっててな。

そうか……残念」

「口調も違いますよね」

「まあ、そういう事。っと、そろそろ斬るのはやめといた方がよさそうだな。ほら、ぐずぐずしないですととと大王様を助け出せよ」

さつき弄つてた時はあまり感じなかったけど、普通に話していると普段とかなり話し方が違う。

でも戦ってる最中はそんなに……ああ、あん時も弄つてたからか……そのうち戦闘用の人格が現れたらどうしよう……

そんな事を考えながら残りをはがしていく。

この馬車も、もう使い物にはならないけど、一応鍛冶場の方に運んでもらうところ。

荆華の事だから、ひとしきり泣いたらいろいろ研究してもっとすごいの作ってくれるだろうし。

幾つか改良点や不便だったところも書いて一緒に送つとかないとな。

やっこの事で引きずりだした政君は、やっぱりというか失神していた。

少し服が濡れていたようだが、近づいたら威嚇されたので放っておく事にした。

その後しばらく政君の機嫌が悪かったのだが、僕のせいではないと思いたい……

第12話（後書き）

何とか、暗殺部隊を撃破……王翦さんが……

すみません、主人公役立たずですね……

せっかくの刀も宝の持ち腐れだし……

まあ、將軍クラスの武は持っているけど、基本は鍛冶屋であり製作者なので。

さて、主人公の装備、新しい物を考えないと。

強化外骨格とか、ペガサスなファンタジーものとか。

いや、これはないな……

まあ、なんか適当に考えよう。

第13話（前書き）

シリアス成分多めです。

のほんとしたいのですけど、状況が許してくれませんでした。

というか、王翦さんがいないと話が重くなりがちです。

そんなわけで、今回は歴史のお勉強？

現実の歴史とはちょっといろいろ違うけど……

第13話

第13話

死を賭した兵は強いという。

一見正しいように思えるこの言葉、実は間違っている。

正確には、死んだ兵は強い、だ。

己を既に死んだ者と捉え、一切の防衛をせず、ひたすら一人でも多くの敵を殺さんと突き進んでくる兵。

兵法にいう、死兵、である。

生きている兵は、欲を持っている。

それは確かに生き残る為に必要な条件ではあるが、時として弱さにつながる。

彼らの目的は戦で死ぬ事ではない。

あくまでも、手柄をあげて生き延びたいのだ。

自分が死にたくないのだから、死ぬほどの無理をしようとは考えないのだ。

秦国の兵は強いと言われている。

おそらく戦国七雄の中では、随一だろう。

そうでなければ、一国で他の六国を相手に立ち向かえるわけがない。だがそれは、首級制という制度と密接な係わりを持っている。

相手の首をとらなければ、まともな人間扱いされない。

榮譽栄達を望むのならば、戦場で手柄を立てる以外に方法はない。

人間の持つ欲望を最大限に利用する制度。
それ故の強さである。

今回の戦いで、長安君一派は自暴自棄ともいえる反乱を起こした。
まさしく死に向かって突き進む戦いの幕を自ら開けたのである。

兵にとってはこれほど迷惑な事はない。

どう考えても、どう計算しても勝ち目のない戦いに駆り立てられて
いるのだから。

そしてここから逃げて、他に行くべきところもない。

それ故に彼らは死兵となっていた。

戦場で死地に陥って死兵となったのだったら、逃げ道を開けてやれ
ばそれで済む。

だが今回の場合、包囲されたわけではない。

鎮圧軍の預かり知らぬところで、彼らは精神的に死地に陥っていた。

そしてその事に、秦王政を初め今回の反乱鎮圧軍が気付くのが遅す
ぎた。

結果としては、鎮圧軍は確かに勝利した。

敵兵に数倍する死傷兵の犠牲と引き換えに……

そして、そこまでの犠牲を出したにもかかわらず、反乱の首謀者長
安君と高陽君には逃げられた。

逃走経路から、趙に逃げたと思われるが、その後の消息は遥として
知れない。

秦王政、王位継承後初めての親征は、こうして幕を閉じた……

始皇伝記より一部抜粋

はあー、やっとこ戦は終わったけど。
みんな暗い、暗すぎる。

まあ、無理もない事なんだけどね。
親征しておきながら、勝ったとは言えない状況だから。

まさかゾンビみたいな人と戦う事になるとは思わなかったしね、みんな。

相手の五倍の兵を連れて出てったのに、帰ってきた時は半分になっていたから……

おかげで、王翦さんは辺境警備に飛ばされてしまった。
一応大將軍に昇進してからだから、形的には出世したと言えるが、
実質左遷に近いものがある。
まあ、辺境が騒がしくなってきた事も事実ではあるが、今後数年、任期の終わるまでは中央に戻ってくる事は叶わないだろう。

王翦さんの代わりに近衛隊統領の役職に就任したのは、呂不韋の門客である郭先という大男。

親衛隊統領に就任したのは、朱姫の配下である沈良。
親衛隊統領だった蒙武は、城外で軍の調練を取り仕切る事となった。

僕は近衛隊副長格としてそのまま残留。
さすがに、政君個人の客将である僕には手を出せなかったようだ。
鍛冶屋としての名声も影響しているんだろっけど。

李斯は蜀の開発の為、戦の直後に城から出ている。

これが政君が今回の人事前に危険を察知して行えた、ただ一つの事。
何故こんな事になったかというところ、呂不韋と朱姫が示し合わせて、
政君の傀儡化に動いているのである。

親征に失敗したといってもいい状況が、彼らの欲を刺激したよう
です。

今なら傀儡化、そしていずれは秦国を我がものに出来るのではない
かと。

まずは、呂不韋が朱姫に宦官を推薦。

??? という名の、偽宦官である。

なんでも、アレで馬車を引き留める事が出来るとか何とか……まあ、
とにかく人外の物を持っていると聞いた朱姫がえらくご執心で、呂
不韋に頼んで探し出してもらったらしい。

もともと本当に宦官にしてしまつては探し出した意味がないので、
あくまでも処置した事にして送り込んだそうだが。

一説には、朱姫の激しさに呂不韋が腎虚になりそうだったので身代
わりとして送り込んだとも言われているが、そんな事はどうでもい
い。

いま大事なのは、政君を取り巻く環境の激変。

それによって朝野に味方が殆どいなくなつてしまつた事である。

勿論軍の首脳部は政君に忠誠を誓っているので呂不韋達に取り込まれてはいないが、若手のまだそれほど位の高くない武将達は既にそれなりの数が取り込まれているし、送り込まれてきた者も少なからずいる。

軍を奪われるわけにはいかない為、そちらにかかりつきりでこちらに目を向ける余裕がないのだ。

そして内政官もかなりの数が呂不韋一派で占められている。

これは元々呂不韋が政治のトップである宰相職についている為、仕方のない事である。

何故これだけ長々と説明をしたかというところ……

政君は今孤立無援の状況にあり、味方になれるような人物が周りには僕しかいないのである。

さすがにこのまま放っておくと、呂不韋に篡奪さんだつされかねない。

そうなると知っている知識が全く役に立たなくなる。

今まで結構好き勝手やってきたし、政君の事に関しても殆ど放置してきたが、歴史が変わる事は望んでいない。

僕の転生者としての最大のメリツトは、これから何が起こるか、どのような人物が出てくるか知っている事に尽きる。

つまり、平穏な人生を送りたいのなら、政君がこけては困るのである。

おまけに、近頃呂不韋が更に危ない事を始めてきている。

呂氏春秋の編纂へんさん。

これは簡単にいえば、天下は徳ある者のものである。という一言に
尽きる。

これから秦国を乗っ取るうとしてしている呂不韋にとって、これ以上な
い大義名分なのである。

その為の宣伝が、一字千金、である。

どういふ事かというところ、編纂の終わった物を街中に置き、その横に
立札を置いたのである。

曰く、この文字を一字でも改変あるいは削除できる者に千金を与え
る。

考えてほしい。

一字だけでも文字を変える事ができれば、その後一生はおろか孫の
代まで贅沢して暮らせるだけの金が入るのである。

当然、皆争って呂氏春秋を読む。

まあ、かくいう僕も読んでいるのですが……

それだけこの千金っていうのが魅力的だという事です。

そんなわけで、徳ある者が天下を治めるといふ思想がかなり広まっ
ている。

これって、このまま放っておいたらヤバイよね……

いや、歴史通りになるんなら問題はないんだけどさ……

僕がいる事で、歴史の改変が行われる可能性もあるし……

というか、恋姫の歴史がどのような道を辿って三国志の世界まで辿
り着いたのか、なんて事はさすがに知らないからなあ……

できれば、僕の知っている歴史通りに進んでもらいたい、と考えるのは当然の事だよ。

そんなわけで、政君にテコ入れする事に決めました。

まあ、最低限にしようとは思っただけど、個人的にも呂不韋と??
って気に入らないんだよ。

星沁楼の四大名妓。

丹、蓉、柔、蘭のうち、丹さんが呂不韋に、蘭さんが??に、それぞれ身請けされてしまったのです。

おっさんと宦官に身請けされちゃったんですよ、信じられます?
特に宦官なんて身請けしたらまずいでしょ。

正体ばれたらどうする気なんですか!
相手が権力者ですから断る事も出来なかったんですよ。

それだけなら悲しいけれども我慢が出来たのです。

彼女達がそれで幸せをつかめたのなら……
たとえそれが力づくに近いものだったとしても……

でも、??。

彼のところに行った蘭さんは、既にこの世の人ではなくなってしまいました。

嫉妬に狂った朱姫のババアに鞭打たれて殺されてしまったのです。

呂不韋のところに行った丹さん。

彼女もつらい思いをしているそうです。

そんなわけで、残りの2人蓉さんと柔さんは僕が身請けさせてもらいました。

彼女達も喜んでくれましたが、仲の良かった蘭さんと丹さんの事を思ってあまり元気がありません。

可愛い女の子を泣かせるあの禽獣にも劣る奴らには、罰をあててやらなければ気が済まないのです。

幸いといつては何ですが、??は野心家です。

政君の味方がいない以上、呂不韋と朱姫に仲違いをしてもらわなければならぬのですから、彼を使うしかありません。

政君の為に、そして何より可愛い子を泣かせた畜生に罰を与える為に。

憎たらしい奴とも友好関係を築かないといけないのです。

それが、この先の計画には必要な事ですので。

見守っていてください蘭さん。

待っていてください丹さん。

そして、僕を見ていてください蓉さん柔さん。

第13話（後書き）

いつの間にかやら廖化君しか政君の周りにいなくなっていました。

政君を助ける事を決意した廖化君ですが、かなり私情が混ざっています。

女の子を大事にしないやつには天罰が下るのです。

というか、下すのです。

そしてこの後は、どろどろした陰謀術数篇……になるのかなあ？

どう考えても最低限のテコ入れですませてはくれなさそうな気がします。

暴走しすぎなきやいいのだけど……

そして、謀略にはまるつきり向かない王翦さんはしばらくお休みです。

腕っ節の必要な場面で戻ってきてもらいますので、ご容赦を。

彼女が戻ってこないと弄れる人がいないので、話が重くなってしま
うのがなんですね。

第14話（前書き）

権謀術数の限りを尽くして……

というか嫌がらせやいたずらレベルですね。

それでも廖化君は頑張ります。

ちょっと表現的にまずいかなあと思う部分もあります。

どうしてもこれはだめだと思われたらご報告ください。

王翦さんが戻ってくるまでもう少し……

って、連続更新は明日までなんだけど、それまでに戻ってこれるのかなあ？

気づいたらえらくお久しぶりな状況になるかもしれません。

第14話

第14話

政君の周りに人がいない……

王翦さんや蒙武さん、李斯さんその他みんな引き離されています。そんな状況で出来る事なんてあまりありません。

味方が少ないなら、敵に共食いしてもらえばいいんです。

幸い、と言っては何ですが、前にも言ったように??^野は野心家です。いつまでも呂不韋の下についていたいと思うような男じゃありません。

朱姫という後ろ盾もあるんですから。

呂不韋にはナニしか取り柄のない男だと思われているようで、安全牌扱いされていますが……

一方呂不韋の方は、権力は自分だけが持っていればいいと考えています。

おっさんが??に期待している事は朱姫の男妾としてその異常性欲が自分に向かないようにする事。

それだけです。

下手に口出してもらいたいとは思ってない筈です。

元々立身出世の為に、自分の愛妾である朱姫を莊襄王に譲った人です。

そこまでして今の地位を築き上げたのですから、今更他の人と仲良く権力を分散しようなんて思える筈がないです。

おっさんにとっては朱姫も駒の一つでしかなかったのですから。

そして、朱姫。

このくそババアは既に??におぼれています。

まあ、若く美男子であつちの方もばつちりな男なんですから、当然だとは思いますが。

頭も悪くないですし、腕もそこそこ立ちますからね。

そんなわけで2人には仲違いをしてもらつ事から始めます。

味方をするのは偽宦官の方。

一番勢力の大きいおっさんに味方しても、意味がないからです。

まずは偽宦官の地位の向上から始めます。

あまり地位が低すぎると、対立関係まで持ち込めませんからね。

ちようどいい事に、現在後宮を纏める内吏の職が空いています。

前任者が老齡の為、引退したので。

そしてまずはこの職に偽宦官をつける事にします。

まずは政君にこの策を進言。

周りに味方もなく、手をこまねいていた政君も同意してくれました。

そう言うわけでまずは政君から朱姫に内吏について進言してもらいます。

内吏という職は、それほど高い官位ではありませんが、宦官のなれる最高位であり後宮のすべてを掌握する為、その権力は大きいです。特に政君がいまだに後見人が必要としている現在、その後見人である朱姫に一番近づける職なのですから、影響力は決して無視出来るものではありません。

朱姫がダメといえ、宰相もなかなか自分の思う通りに政務を動かす事は出来ないのですから、当然ですね。

宰相は朝野の主導権を握っているとはいえ、一応形式的には最後の決定は政君がする事になっており、実質後見人が許可を出さないと政君は許可を出せないのです。

そして、当然の事ながら呂不韋はこの提案を拒絶しました。

おっさんにしてみれば、今の状況で上手くまわっている以上余計なリスクを背負い込みたくはない筈ですから。

当然、愛しい人を蔑ないがしろにされたと考えた朱姫は呂不韋に対して不快感を抱きます。

政君が賛成する事で、なんとか承認される事となりました。実権を握っているとはいえ、国王とその後見人の意思にはおっさんも反対しにくかったようです。

さあ、ここからが、僕の出番です。

「???殿、この度は内吏就任おめでとうございます」

「おう、これは廖化殿。貴卿から話しかけてくるとは珍しい」

まあ、そうでしょうね。

こんな奴に近寄りたいたなんて思ってますでしたし。

「まったく、宰相も少し器量が小さすぎますね。後宮を纏める??殿の功績をまるつきり無視しておられるとは。お二方は仲が良いものだと思っていたので、正直今回の反応は意外でした」

「貴卿もそう思われるか……」

「ええ、元々今回の??殿を内吏にというお話は私の方から大王様

に進言させていただいたものです。大王様も母上のお世話を一身に引き受けておられる貴卿に感謝の念を持っていたので、すぐに賛同してくれました。ただ、いまだ実権を持たぬ身故、朝野での発言権はありません。そこで、太后様の方から提案していただくという形をとる事にしたのです。太后様と宰相の“仲がいい”のは周知の事実ですからね。太后様からの提案ならば、宰相も一も二もなく頷くと思つたのですが……」

「……」

「却つて貴卿に恥をかかせてしまったようで、申し訳ありません。お詫びと言つては何ですが、今晚一緒に飲みにもいきませんか？」
「それはいいですな。ぜひお付き合ひさせていただきます」

そうして、今夜偽宦官を連れ出す事に成功しました。

行先は、星沁楼ではなく摘星楼。

星沁楼と一・二を争う大きなお店です。

実は今晚ここに呂不韋が来るという情報があるんです。そしておっさんのお気に入りの子も既に調べ上げています。

おっさんより早く来て、その子呼び、??につけます。

これで準備は終わり。

おっさんのお気に入りの子は勿論美人さんです。わがままボデイをお持ちで、性格もいい子です。この摘星楼のトップですからね。

??もその魅力にメロメロになったところで、いよいよおっさんがやってきます。

そして勃発する女をめぐるおっさんと偽宦官の醜い争い！

……にはなりません。

少なくとも現在のところ、おっさんと偽宦官の差は大き過ぎるので
すから。

長年宰相職を務めているおっさんと、今日内吏に昇進したばかりの
偽宦官では勝負にもなりません。

あっさりとおっさんに女の子を奪われてしまいます。

当然今まで楽しくやっていた分、おっさんに対する怒りが増大しま
す。

昇進に反対された恨みが残っているところに、この仕打ちですから。
スケベな偽宦官にはこれ以上ないくらいに効果的です。

しかも衆人環視の前で女を奪われるので、面子も潰されましたし。

「政君。あの偽宦官も内吏になった事だし、屋敷を下賜するってい
うのはどうですかね？」

「それはいいと思うが、どこに？」

「そうですね……ここはやはり宰相府の目の前でいいんじゃないで
すか？これから派手に噛み合ってもらわなきゃならないんですから、
面と向かっていた方が喧嘩もしやすいですよ。」

「まったく、廖化殿にはあきれるな。随分意地が悪い事を考えつく
ではないか？それで本当に鍛冶屋をやっつけていけるのか？」

「性格が悪くなったのはここに来たからです。原因に説教される覚
えはありません。それに鍛冶屋の仕事は荊華達が頑張ってますから
ね、何の心配もありませんよ。」

「そんなものかね……まあいい、わかった。早速手続きをとる事にしよう」

そうして宰相府の前に内吏府がおかれる事が決定しました。

宰相府には及びませんが、破格の大きさに偽宦官も大喜びですし、自分の男を大事にしてくれる政君に朱姫のババアも大喜びです。

まあ、おっさんとその取り巻き連中だけは苦虫を噛み潰したような顔をしていましたが、ね。

そんなこんなで2人の畜生の権力闘争は日に日に激化していきます。

僕ですか？

参加なんてしませんよ。

裏で火をつけて煽っているだけですから。

火事っていうのは対岸でやっているから見物できるんです。

自分の家が巻き込まれて燃えたらシャレになりませんよ。

一年後、これまでの功績により??に長信候の爵位が授与されました。

既に文信候の地位にあるおっさんと、少なくとも爵位の上では対等になったわけです。

門客もおっさんの三千人には及びませんが、かなりの数を集めています。

これによって、2人の畜生の権力闘争がより一層その激しさを増したの言うまでもないでしょう。

まあ、功績っていっても、ぶっちゃけ色狂いの太后のお世話頑張ってますねって意味ですけどね。

後宮を纏めるのに功があつた、という言い方ではありましたが、わかる人にはわかるんだろうなあ。

秦軍の首脳連中は苦笑していますし、宰相一派は怒り心頭って感じ
です。

秦軍の方はトップの方がまだしつかりしているので、おっさんや偽
宦官の手には落ちていません。

落ちてしまったら、政君の命がやばいのでここは絶対死守してもら
っています。

おっさんの手下も偽宦官の手下も相互に足を引っ張り合っているの
でかなり助かっています。

大きな戦争も今のところないですから、敗戦の引責辞任だの戦勝の
昇任だのという話にもなりませんから、殆ど動きはないです。

あ、いえ、訂正します。

辺境の方で寂しく頑張っていた王翦さんが上將軍に叙せられました。
秦軍で四人目の上將軍の誕生です。

戻ってきたらかなりの力になってくれる事でしょう。

配下の兵達も軒並み昇進しています。

その中には新しく將軍になった蒙武さんもいます。

彼女、いつの間にか新兵訓練から外れて、王翦さんの下につけられ
ていたんです。

多分、秦軍の首脳連中が動かしたんでしょう。

近くに空職を一つ作って、互いに争わせる為に……

ほんと、やる事がえげつないですよね。

これだから年をとった人は老獺ろうたけいといつかなんといつか……

え？自分の事を柵に上げるな？

知りませんよ、そんな事。

僕のやってる事なんて子供のいたずらみたいなものですよ。

そして、副将に昇進したのは王翦さんの妹、王贲おうへんさんです。
彼女は王翦さんほどの武は持っていませんが、かなりの名将になります。

歴史を知っている僕が言うんだから間違いありません。

そういうわけで、辺境で着々と実力を養ってもらっています。

政君の後見人が外れるまで、後2年。

それまでにはできるだけ多くの味方をつけておきたいですし、畜生
共の勢力も削っておきたいです。

第14話（後書き）

これで少しは息がつける……

次回は……うーん、実権取り戻すところまでいけるかなあ？

もうちょっとテコ入れしようかなあ、と考えていますので。

危惧通りに廖化君の頭から自重という文字が抜けてきています。

もうちょっと……ねえ。

蒙武さんも王賁さんも秦の誇る名将です。

秦の統一に多大なる貢献のあった人達です。

実在の人物ですよ。

第15話（前書き）

これにて連続投稿はいったん終了させていただきます。

残念ながら王翦さんは戻ってこれませんでした。

政君が実権を手に入れるにはもうちょっとかかりそうです。

でも助っ人がいます。

どう助けるのかは知りませんが……

メインの方で煮詰まったら、また書かせていただきますので、気長にお待ちくだされば幸いです。

初めてアクセス解析をしました。

なんと驚きのPV1000000&ユニーク100000突破。

皆様、ありがとうございます。

一つだけ残念な事は、毎日更新したら週間アクセス数がどれくらいになるかと試してみたかったです、1日の16時ぐらいから突然数字が落ち込み始めているので、正確にはわからなかった事です。私一人ではない事から、何らかのトラブルによるものと判断しました。

週間アクセスって日曜から土曜日までの合計なんですよね。

残念……こんな事もうできないんだけどなあ……

さすがにあと1週間続ける気力はないです、はい。

次にやるとしたら、ストックためてからです。

第15話

第15話

政君が実権を握るまで、後2年。

王翦さん達はまだ辺境警備しなきゃいけないから、こっちはこれないし。

まあ、来たところで脳筋ばかりだから、実力行使が必要な状況じゃない限り役に立たないし。

でもなあ、一応今のところいい感じで動いているけど、やっぱりまだこっちの勢力が弱いんだよなあ。

呂氏春秋で広められた、徳ある者が天下を治める、この思想が厄介。

今のところ政君には特に取り上げるべき徳ってものがないからね。

良くやっているとは思っけど、何も知らない庶民の目には宰相や太后の動きばかりが見えるから。

後見人がついているこの状況では、良い政治をしたところで後見人や宰相のイメージアップにしかない。

逆にひどい政治をすれば、お飾りとはいえ責任をとらなければいけない立場。

うーん、何かもう一押し、政君自身に徳がある事を天下に知らしめないで、下手したら2年後もこのままの状態が続く事になりかねない。

その危険性はかなり高い。

太后は??を通じてこちらについているとはいえ、それでもこちらが劣勢な事に変わりはない。

二つの派閥の対立感を煽っているだけで、政君自身の派閥はまだそれほど力がないのだから、裏切られた場合手の打ちようがない。

おっさんだつて決して馬鹿じゃない。

いやかなり頭の切れる人間だ。

こちらの思惑なんかある程度はお見通しだろう。

そうになると、これから先??の懐柔に出る事が予想される。

いくら煽りまくって不倶戴天の敵に仕立て上げようとしても、限界というものはやはりある。

特に太后は、母である事よりも女である事を優先している。

おそらく子供ができたなら、好きな男の子供を王位につけたいと思うだろう。

今までできなかったから放っておいたが、考えてみればこれが一番まずい。

史実でも太后は偽宦官との間に二人の子供を儲けている。

せめてその子供が生まれる前に、政君の王位を盤石のものとしなければいけない。

両者が共闘しなくても、敵にまわった時点でこちらに打つ手はないのだから。

それまでの間に政君に徳があると知らしめ、少しでも支持者を増やさなければならぬ。

さて、どうするか……

取り敢えず必要な大道具は荆華のところで作ってもらおう事にして……
設計図でもひきますかね。

なにを作るかですって？

秘密ですよ、勿論。

所詮この世は騙しあいなんですよ。

奇術の種はばれちゃいけないのです。

奇術の種が出来るまでにはまだまだ時間がかかるし。

ここは一つ前からやってみたかった事を！

というか、いろんな国を見て回りたいたいんだけどね。

正直今は厳しいんですよ。

おっさんや偽宦官の動向には絶えず気を配っていないきゃいけませんし。

せめて政君の護衛が勤まるだけの武を持っている人で、それなりの知を持つている人が欲しいんですよ。

脳筋なあの人達は元々任期がまだあけてないし、あいていても使えない。

これからどんどん呂不韋の攻勢は激しくなる一方だろうし、??の方も決して油断できる状況ではない。

離れちゃいけない時期なのはわかっている。

それでも僕は諸国をまわる必要があるっ！

そんなわけで政君に直談判する事にしました。

一人さびしく食事中の政君の執務室に乗り込んで、

「政君、突然ですが、お暇いとまさせていただきます！」

あ、間違えた。

突然の僕の行動に驚いたのが、口の中の物を全部僕の顔めがけて嘔き出してくれました。

汚いですよ政君。

え？女の子を探しにいくんだったらうって？

ナ、ナンノコトデセウカ……

ソナナワケナイジャアーリマセンカ。

僕は純粹に各国の動きを調べたいと思ってですね……

政君の護衛？

そつえばそんなものもやってるよね。

実際、反乱鎮圧以外で護衛の仕事なんてした事なかったから。

というか、護衛以外の時に命を狙われる事が多いんですけど。

僕が！

狙うなら、政君を狙ってくださいと何度言いそうになった事か。

言えなかったのは、やっぱり死なれちゃ困るなあ、と途中で思いなおしたから。

忠誠心？

そんなものはないっ！

人を散々厄介事に巻き込んでいて忠誠を期待するっていつのはどう考えてもおかしいよね。

でも死なれちゃ困る事も確か。

うん、護衛ね……

ここは……あの人を呼ぶしかないのかっ！

武ならおそらく最上級の猛者。

知でも生半可な軍師や政治家より役に立つ。

その名は……

西施っ！

一応、彼女？も外史の管理人だからね。

人外な強さは持っているんですよ。

そんなわけで、呼ぶ事にしました。

用意する物は……

油ギツシユなその肌をよりオイリーにする、香り高い麝香鹿の脂。

派手でけばけばしい原色の色使いが目にも痛い、蜀産の最高級絹で出来たふんどし。

そして、生贄として用意された、見目麗しい男おのこ。

ちなみに生贄の名前は李信りしんと言います。

正史では、王翦さんが楚攻めに60万必要だといったところ、兵が多すぎると文句を言って三分の一の20万で出陣し、大敗した人です。

曾孫には漢の時代の有名な飛將軍・李広りきやうがいます。

色々迷ったんですよ、これでも。

燕から人質として送られてきている太子丹君は、あらゆる面で李信君を超えています、さすがに生贄にしたら外交上問題になりそうです。

若手将校で有能な桓騎君かんきは、李牧さんには敵わないとはいえ秦の統一には欠かせない人材です。

同じく若手将校の楊端和君ようたんわも、秦の統一には欠かせません。

それに彼は政君に味方をしてきている数少ない有力豪族の出身ですから、生贄にはちょっとできません。

そうなる和三羽鳥と謳われた最後の一人、李信君に白羽の矢が立つわけです。

彼は正史でも大した実績を残せませんでしたからね。いてもいなくてもさほど問題はないかな、と。

というか、いない方が統一が早まるような気がします。

うん、ほんとうにゴメン。

かわいそうだが、私の為だ。

おとなしく餌食になってくれ。

さるぐつわを噛ませて、亀甲縛りにしたまま地面に放置してあります。

真つ赤な顔でなんか言っていますが、そんな事は知りません。

どうせこんな事して宰相が黙っていると思うのか、とか言っているんでしょう。

彼は犯罪人なのです。

呂不韋の客卿達と仲がよく、よく星沁楼に遊びに行っていたのです。さすがに身分が違いすぎるので、おっさんと一緒にした事はないらしいですが。

容さんと柔さんが彼の事を覚えていました。

しつこく丹さんを狙っていたそうです。

おっさんが丹さんを身請けするのを手伝っていたそうです。

それでいて最近こつちに近づいてくるのです。

もう決まりですよね。

間諜とんでもいいですよね。

そういうわけで、僕の中では彼は裏切り者に決定しているのです。

居なくなつて困るのはあつちなので、どうでもいいです。

むしろ望むところなのです。

まあ、死ぬわけはありませんし、ちょっと新しい世界を体験してもらつただけですから。

彼のやった悪行に比べれば、この程度大した事ありませんよね。

エロイムエツサイムエロイムエツサイム……

そんなわけで、西施を召喚いたしました。

召喚呪文については全力でスルーしていただけると嬉しいです。

「あつはああああああああああんっ！わたくしを呼んだ素敵な殿方はどなたああん？」

雄叫びと共にやってきたのは、中国史上数少ない傾国の美女。

西施。

だった筈の代物です……

華麗にポージングを決めて現れてくれました。

自宅で召喚はしなくなかったので、宮中で召喚しました。

さすがに人払いはしてありますよ。

まあ、どっから入ったかについては……一言飛んできた、とだけ言っておきましょう。

どんな登場の仕方をするかわからなかったので、外でやりましたが正解でしたね。

普通に歩いてくるとは思いませんが、召喚陣から現れる程度の事は平気でしそうですから

いつも通りのシヨッキングピンクのふんどし一丁きりりと締めて参上してくれました。

できるだけ人目につかないようにと、日陰でやって正解でした。今日は雲一つない、いい天気ですから。

やっぱり、何度見ても慣れるものではありません。

というか、慣れたら人として終わってしまいそうな気がします。

何故呼び出せるか説明していませんでしたね。

実は、一度目の衝撃的な出会いから、その後何回かお会いしているんです。

調子こいて鉄だの鋼だのを作ったんで、イレギュラーだとばれてしまいました。

一応、僕の武術の師匠に当たる人でもあります。

長時間一緒にいられるほど僕の心臓は強くないので、気の扱い方の基礎だけを教えてもらいました。

漢女道？

そんなものを習った覚えはありません。

取り敢えず貞操を守りきった事が、僕の一番の誇りです。

「お久しぶりです、師匠」

「あらん、廖化ちゃんじゃないの。いよいよ漢女道を極める決心でもついた？」

「そんな決心は死ぬまでつきません。ところで師匠、今回お呼びしたわけは……」

「ふーん、そおゆう事。それじゃあ仕方ないわねえん」
「こちらが、師匠への貢物となります。ご笑納ください」
「あらあん、可愛い子。こんなにふるえちゃって。怖がらなくても大丈夫よん。やさしくシテあげるから」

顔面蒼白で気絶しそうな李信君は、こうして己の役目を全うしてくれたのです。

僕が戻ってくるまでの間、たつぷりと後悔するがいいのです。

供物を奉げて快くOKももらえました。

これで、僕がない間の体制は万全です。

あとは、政君にも紹介しないといけませんよね。
四六時中、傍にいてもらう事になるんですから。

……大丈夫……ですよね？

「失礼します。政君、僕の代わりにの護衛を連れてきました」

化け物は扉の向こうで待たせて、まずは僕一人で執務室に入ります。
ここまで来る途中でいろいろと周りが騒がしかったです、それは無視しました。

というか、現在進行形でうるさいです。

政君も不審そうな顔をしています、ここでは話しません。
どの道もうすぐ、いやでも理由はわかりますからね。

「僕の武術の師匠に当たる人で、知勇に優れた方です」

「そうか、それで、そのお方は何処に。いや、廖化殿の師匠というのならばさぞかし立派なお方なのだろうな。このまま会うのは失礼ではないだろうか……うむ。廖化殿、対面の儀は明日に致そう。それほどの方をお迎えするのだ、斎戒沐浴して出迎えなければ」

「いえ、もう扉の前でお待ちいただいているので、そのまま帰しては却って不敬に当たるかと。師匠は気さくで堅苦しい事は嫌いなお方。そのままでお会いした方がよいと思います。師匠には既に説明してありますし」

「そうか、ではお呼びしてくれ」

さあ、政君。

頼むから気絶しないでくれよ。

「それでは師匠、お入りください」

第15話（後書き）

そんなわけで、廖化君は人材発掘の諸国漫遊の旅に出る事になりました。

ちよっと？外道が入ってしまいましたか。

そんな事している暇はないだろうとは思いますが、これもひとえに政君の為？

そんなこんなで次回からは各国を巡る旅に出ます。

代わりの人もいますので、取り敢えず留守中の警護について不安はありません。

どちらかというと、精神的に壊れないかが不安ですが……

西施が何とかしてくれるでしょう。

うん、きっと大丈夫。

始皇帝はこれくらいじゃ壊れない強い子ですよ、きっと、たぶん。

ちなみに西施の役割は抑止力です。

化け物は、いるだけでいいのです。

動いたらいけないのです。

帰ってきたら国がなくなっていたらシャレになりませんか。

それでは次回は未定です。

気を短くしてお待ちください。

間違えました。

気を長くしてお待ちください。

投稿する時には活動報告で一言書かせていただきます。

第16話(前書き)

取り敢えず書けたので投稿。

先に謝っておきます。

今回はつちやけすぎました。

……作者が……

前回ちよつと最後がやつつけになっちゃったので、ここで補完。

ちなみに現在、原作名検索で週間アクセス第4位。

まあ、今週だけです。

来週にはがた落ちすると思います。

アクセス週間毎日投稿した結果です。

ちなみにトップテンの中で一番お気に入り登録少ないです。

なんか、すっごい場違い感……

嬉しいって事よりも、こんなところに出張って申し訳ないって感じ
です。

第16話

第16話

一週間後、僕は無事に秦を抜ける事に成功しました。

現在は久しぶりの自由を満喫しながら、楚へ向かう船に乗っています。

抜けた、というのは許可を正式にとれたとは言い難い状況だったからです。

何しろ、政君には一応の許可は口頭では取りましたが、正式な許可の発行前に政君が倒れてしまったので。

一応政君の許可をもらっているので正式な許可証の発行を求めたのですが、その交渉は難航を究めました。

具体的には、派閥に関係なくすべての人達が反対したのです。

師匠に居着かれるのがそれほどこいやだったのでしょうか。

勿論知った事じゃないので無視しました。

政君から口頭で許可をもらっているとゴリ押ししました。

多分、これで彼らも政権闘争などをやっている暇はないでしょう。人を攻める暇があったら、自分の後ろをガードしなきゃならない筈ですから。

まあ、そちらの気がある人には通じない作戦ですし、女性には全く意味もないのですが。

少なくとも、宰相一派、内吏一派には効果は抜群でしょう。

常時、後ろを気にしながら悪だくみなんてできませんからね。

女性を弄もてあそぶ人達にはいい薬です。

政君ですか？

そう言えばあの後、気絶したつきり会ってませんね。

師匠が四六時中傍についているので大丈夫だとは思いますが。

ああ、師匠にはちゃんと釘を刺しときましたよ。

政君一派には手を出さないようにって。

まあ、政君一派は女性の比率が結構高いので、師匠に狙われるような人もあまりいませんからね。

政君に近く、ちよくちよく顔を出す桓騎君と楊端和君には手を出さないようにとも言うっておきましたし、たぶん大丈夫でしょう。

自分から歴史を変える管理者なんていないでしょうし……

あれ、そうなると李信君は……

うん、考えるのはやめときましょう。

未来に影響が出るような供物を受け取ったとは思えませんし、きつとこれが正しい流れなんです。

それにしてもさすがは師匠。

その場にいるだけで争い事なんて一切起こりません。

皆さん片手を後ろにまわして、必要最低限の事しか言わずに仕事に没頭してくれます。

この調子だと、帰ってきた時にはすごい国が出来上がりそうです。

……それまで、皆さんの精神が持てば、ですけど……

僕の引き留め工作もすごかったです。
おっさんも偽宦官もすごい必死でしたから。
涙を流す、叩頭するなんて序の口です。
僕の部屋の前には綺麗な女の子達が列を作っていましたし、彼女達が
待っている間座っているのは金銀財宝の詰まった箱です。
勿論、財宝は国庫に全部納めさせていただきました。
女の子の方は、残念ながらお帰りを願いましたが。

いえ、正確には親元に帰っていたできました。
本人の意思を無視して連れてこられた子達も多かったですし。
そのままあの禽獣共の屋敷に送り返すと、何をされるかわかったも
のじゃないですからね。

それに綺麗なお姉さんだったら何でもいいというわけではないので
す。

据え膳食わぬは男の恥とは言いますが、明らかに毒の入った据え膳
を食うバカはいません。

そうでなくてもタダで手に入る美女美少女に興味なんてありません。
落とす過程から楽しまないと面白くないですから。

確かに僕は女の子が好きです。

夢はでっかく、目指せ後宮^{ハレム}一万人、とまではいかななくても綺麗なお
嫁さんをたくさん欲しいとは思っています。

ですが、そこはやはり恋愛の結果というのが望ましいのです。
自分がごく平凡な顔立ちだというのは自覚していますし、そこまで
女の扱いが上手いわけでもありません。

それでもやはりどうしても譲れない境界線というのは持っているつ
もりです。

そんなわけで数々の引き留め工作を振り切り、何とか抜け出す事に成功しました。

壮行会？

そんなものではありませんよ。

おっさんや偽宦官に涙流されながらしがみつかれるなんて御免こうむります。

傍から見たら、とんでもない誤解が生まれそうです。

ただでさえ師匠を呼んだ事でいらぬ誤解をつけているんですから。

これ以上の厄介事は断固として遠慮します。

青い空の下。

今、僕は最高にハイってやつです。

思えばここ数年国外に出てませんでしたからね。

身も心も解放されて浮かれまくっています。

蓉さん柔さんにはついてきてもらっています。

屋敷の中にとどうしても蘭さんや丹さんの事を思って落ち込んでしまいますからね。

たまには気分転換もいいでしょう。

彼女達も武芸の腕はそれなりに立ちます。

妓女だったとはいえ、自分の身を守る事は必要だったそうですから。まあ、この世界は男よりも女の方が強いので、僕の屋敷に来たあとは気晴らしの為と称して体を動かしていたら、なんかいつの間にかすごい強くなっていました。

具体的には、2対1でなら王翦さんともやりあえるレベルです、勿

論勝てはしませんが。

僕とでしたら……お、女の子に向ける武器を僕は持ってません！

そういう事にしておいてください。

将まであと一歩って感じですかね。

気の使い方覚ええましたし。

軍人になってもらうつもりはありませんが。

まあ、本当のところは、おっさんと偽宦官の権力闘争が激化してきたので、巻き込まれないように、巻き込まれても自分の身は自分である程度は守れるようにと思ったのですが、少々強くなりすぎたような気がしないでもありません。

そんな彼女達にも、当然の事ながら武器防具をプレゼントしてあります。

勿論膠化印ですよ。

蓉さんには、夫婦刀を。

あ、干将莫邪ではないですよ。

あれは製造工程で人が死にますからね。

というか、溶かした鉄の中に人が飛びこまなきゃ作れないような武器なんて作りたくありません。

名前は鴛鴦刀えんおうとうと付けました。

柔さんには、僕の持っていたなんちゃって日本刀を作りなおした物を。

ちようちよと僕用に新しい武器を作ろうと思っていたので、こちらは柔さんの武器の材料になってもらい、女性用に軽く仕上げてみました。やはりあれは女性が普段持つには重すぎますので。

具体的には極限まで薄くしたんです。

長さも、二尺以下に抑えてあります。

名前は連理刀れんりとうです。

2人の刀の名前を合わせて比翼連理ひよくれんりの刀という事で。

防具はどちらも動きを阻害しない、ごく軽い物を。

特に胴体部は彼女達のサイズにぴったりとあつた物を。

せっかくの見事なスタイルを鎧で隠すなんてもつたいないから、せめてラインだけでもなんて思ったわけではないですよ。

ええ、けっして。

それでも鋼製なので、そこいらの武器では傷も付けられませんしね。

そして僕の武器なんですが、槍は重いし長いしで戦場以外では取り回しが悪いので却下。

なんちゃって日本刀は柔さんの刀の材料にしてしまったので、これもありません。

そんなわけで新しく作ってみました。

コンセプトは、日本刀の技術を盛り込んだ中華刀です。

簡単に言うと、四方詰しほうじつめで中華刀を作ったわけです。

自分の命を預ける武器ですから、一切の手抜きなしでやりましたよ。いえ、他の武器だって手抜きはしてませんけどね。

四方詰しほうじつめで作ったのはこれが初めてです。

(注・四方詰とは、刀の製法の一つで、心金、刃金、棟金、側金を合わせて作るやり方です。

長くなるので説明は省かせていただきます。

興味のある方はご自身でお調べください。)

そんなわけで作ったのが、この逆刃刀・真打……ではなくて、屠竜とりゅう刀とうです。

たまたま手に入った怪しい隕石なども興の向くままにぶち込んであ

りますので、とんでもなくヤバい代物が出来ました。ぶち込んだ隕石がどう作用したのかはわかりませんが、鋼のみで作るより重く、そして硬くなったのです。

たぶん二度と同じ材料は手に入らないでしょうから、正真正銘これは一品物という事になります。

そして鞘も同じ材質で作ってあります。

二刀流みたいに扱えればいいな、と思ったので。

屠竜刀の方は基本的に、というか攻撃一辺倒の武器ですから、こちらの鞘は防御に使う予定です。

屠竜刀のみでどちらも出来ればいいのですが、さすがにそれだけの技量はまだありませんので。

防具に関しては、零式鉄球吸引で……でもなくて、こちらの世界の防具と似たような物にしました。

やってみたかったです、材質が不明な点、一発で死ぬような痛みがあるのに何発も食らわなきゃならない点、なによりフルプレートアーマーよりも目立ちそうな点を考慮して、その考えは捨てました。

間違いなく人外認定受けそうですし。

できた防具は簡素なものです、材料が鋼なので、そう簡単に傷つけられる事ありませんしね。

以前のとんでもなく重い全身鎧に比べて随分と軽くなりました。

これなら防具で受け止めるだけでなく、避けるとか流すとかも使えそうです。

最初っからこうしていれば、とも思いましたが、以前は腕もなかったですから生存確率を上げる事を最優先にしていましたから、仕方ないですよ。

それにあれを作っていなかったら、気の習得にあれほど必死になる事もなかったでしょうし。

これからは、外見上で目立つ事がなくなるのでほっとしています。

ちなみに武器はもう一つ作りました。

一応、屠竜刀を作ってから練習しましたので、以前のように刀は鈍器だ！つと言い張るような無様な真似はしないで済むので、ならば最初っから鈍器を作ってみようではないか、と思い立ってしまったものですから。

そういうわけで作ったのは、うん、どっからどう見てもただの竹の棒です。

長さは三尺ほど、竹製の杖を想像していただければまず間違いはないでしょう。

もっとも、当然の事ながらただの竹の棒ではありません。

中の節を全部くり抜いた後に鋼を流し込んで作ってあります。

立派な凶器です。

打狗棒だくごぼうと名付けました。

え、狗打ち棒なんてかつこ悪い？

いいんです、僕は気に入っているんですから。

そんなわけで僕達は3人諸国漫遊の旅、又の名を人材発掘の旅に出ています。

待っていてください、まだ見ぬ麗しの乙女達。(乙女です、間違っ

ても漢女おとめではありません！)

きつと貴女達を探し出してみせますとも！」

あれ？蓉さん柔さん何故武器を振り上げているのですか？

それはお話に使う為の物じゃありませんよ……

ひよっとしたら、今口に出してました？

顔から音を立てて血が引いていくのが自分でわかります。

「ちよつと、O H A N A S H I しょうか」

「さあ、貴方の罪を数えなさい」

え、なんでそのセリフが出てくるんですか？
お2人とも転生者じゃないですよね。

「その言葉は一体どこで？」

「西施さんに教えてもらいました」

「お仕置きの際にはこのセリフを使うのが効果的だそうです」

「あんの人外めえ！いらん事ばかり教えやがって……」

「「それではこちらに」」

周りの船員が憐みの籠った目を向けてきます。

ありがとうございます、心配してくれるんだね。

と思ったら、リア充だのもげるだの死ねだのという声も聞こえてきます。

憐みの目で見ていた人も、手で押さえています、口元が笑っています。

うん、君達を雇った事を心から後悔しました。

生きて戻れたら、八つ当たりの対象にさせていただきます……

「「ずいぶん余裕ですわね」」

そのまま僕は船室まで両脇を抱えられて引きずられていきました……

訂正、八つ当たり出来るほどの体力は残っていないでしょう……

ああ、ドナドナが聞こえる……

もう一つ訂正、久方ぶりの自由を満喫はできないようです。

第16話（後書き）

やっと旅立ち。

楚。

出る人は大体決まっていますよ。

性別は史実と違う人もいますけど。

性格は史実とは確実に違いますけど。

次回更新日は未定です。

たぶん、もう一本の方を優先する事になると思いますので。

次に投稿する時は諸国漫遊編が完成した時になると思います。

もしくは一国ずつ。

完成した時だとすると、最低でも10話以上にはなりそう。

小出しの方がいいでしょうかね？

第17話（前書き）

三か月も更新せず申し訳ないです。

これ以上放っておくのも良心の呵責が……

というわけで一話だけ投稿です。

本当は連続投稿しようと思っ
ていましたが、出来に納得して
いないので。

改めて書き直しているの
で、楚国編が書き終わっ
たら連続で投稿し
たいと思います。

第17話

第17話

船の中でも色々な事があります。

その中でも特に重要なのは、途中で乗ってきた慎しんという楚にある小国の一団でしょう。

元々この船は僕が雇った船なので、基本他の乗客を乗せる必要はないのですが、10人しかいなかったので乗せる事にしました。

決して10人中6人が美女だったからとか、残りの4人中1人が10歳ぐらいの少年だったからというわけではありません。

特に後半の理由はあり得ませんので、くれぐれも、くれぐれも誤解はしないでいただきたい！

おっと、暴走してしまいましたね。

なんでも先代の国主が病で亡くなったらしく、楚の都に行って継承の為に挨拶をしなければいけないのだとか。

国主を継ぐ予定の子供は現在10歳。

そして、その後見人である生母もまだ20代半ばの美女です。

傍にいる女性達もまだ20そこそこの若さで美女揃いとなれば、楚で待ちつける春申君の餌食になるであろう事はまず間違いないでしょう。

なにしろ春申君ときたら、呂不韋に匹敵する女色家として名高いの

ですから。

ちなみにこの時代好色で名高い人物は三人います。

1人はご存知秦の宰相、文信侯 呂不韋。

1人はこれから行く楚の令尹^{れいいん}、春申君 黄歇^{こっあつ}。

令尹とは楚の官制度で他国でいう宰相に当たる官職です。

そして最後の1人は西の秦と並ぶ東の大国齊の宰相、安平君 田单^{でんたん}。

いずれ劣らぬスケベ親父どもです。

揃いも揃って宰相というとんでもないエロオヤジどもです。

ひよつとしたらスケベな人間の方が出世できるのだろうか、と考えさせられた事もあります。

ちなみに現在の国力は、七國中第一位が秦、第二位が齊、第三位が楚なのですが……

政治ってなんでしようね？

先程は好色と言いましたが、正直こんな爺どもを好色と呼びたくはないです。

英雄色を好む、との言葉もある通り、好色は別に悪い事ではありません。

秦の始皇帝は後宮10000人と言われていましたし。

まあ、今の政君を見て将来そうなるとは思えないのですが。

話がずれましたが、この時代において好色は別に悪徳でも何でもありません。

それは本人にそれだけ多数の異性を惹きつける能力や魅力があり、養うだけの財があり、当人の地位を周りからも認められているという証明でもあるのですから。

まあ、そういう事なので、この時代の人は性に関してはかなりオープンです。

女の人でも複数の旦那さんがいる人もいますから。

この辺が僕の知っている歴史と恋姫世界との違いだとは思いますが、要は本人の甲斐性次第、という事ですね。

僕だって蓉さんや柔さんがいますから、その点について人様に文句を言える立場でもないのですが。

ただこの爺どもの場合は話が別です。

気に入った女の子を権力や金で無理矢理言う事を聞かせているのですから。

こんなのは好色とも色好みとも言いません。

単なる色キチガイです。

美女美少女の味方を自任する僕にとっては許す事の出来ない存在なのです。

話を戻しましょう。

諸国漫遊の旅に出た時から、会う事になるんだろつな、と覚悟はしていました。

とはいえ、めんどくさい相手ではあるので、できる事なら敬して遠ざけるを実践したいところです。

さすがに一国の宰相に手を出すほどバカではありませんからね。

蓉さんや柔さん、僕の女の子達に手を出したら情け容赦なくぬつ殺しますけど。

で、招かれざる客人の話です。

話を聞く限りでは、どうやら慎国を継承できるかはかなり怪しいそうです。

前国主は、春申君とは控えめに言ってもあまり仲が良くなかったそうなので。

まあ、ぶっちゃけてしまうと春申君が奥さんに手を出そうとしたのでぶん殴ったそうです。

そして殴られた事を根に持っている春申君が妨害工作をしてくる可能性は高い、というより既に妨害しているんでしょうね。

一方の当事者から情報を得ている以上、状況が今一つ掴めませんし、本人達にその気はなくとも無意識化で感情移入がされている事は確実です。

偏った情報から勝手に判断するのは危険ですが、彼女達も継承問題が一年経っても全く進展しないのに焦れて今回の旅と相成ったわけですから、それほど外れてはいないと思います。

そんな春申君ですが、楚の最大派閥とはいえ当然ながら反発する人もいます。

なにしろ権力を嵩に着た漁色家なのでから。

まあ、実力はあるんですけどね。

やり口が汚いわ、賄賂は受け取るわ、女を要求するわ、とやりたい放題ですから。

道を歩いている気に入った女の子をさらうといった事は日常茶飯事だそうです。

現在の楚において春申君と対立しているのは、元春申君の食客で、楚の幽王の伯母にして現太后の姉でもある李園さんです。

妹が先代の孝烈王の王后になり、食客から一躍高位の貴族にまでな

りあがった人物ですが、その才覚は決して春申君に劣るものではありません。

ちなみに本来、楚にはもう一人の令尹がいました。

僕のお得意様の一人、呉起さんです。

どこぞの小国というか小領地で宰相をしていたのですが、先代王の時に楚に招聘されました。

孫武さんのゲリラ活動に手を焼いた楚が、泣きついたという感じですよ。

実際、呉起さんがいた間は孫武さんも楚を攻めませんでしたから、目論見は十分成功していたと言えます。

残念ながら先代王の死と共に失脚してしまい、楚から追放されてしまいました。

まあ、史実では先代王の死と共に殺されているので、命があるだけよかったですね。

まあ、殺しても死ぬような人じゃありませんから、どこぞで無事にやっつてる事と思います。

ひょっとしたらそのうちひょっこり咸陽に来そうな気がしますし、ね。

ちなみに孫武さんは楚に併呑された呉の将です。

戦争に関しては百戦百勝といっても過言ではないのですが、生憎と呉王の周りにいたのは奸臣かんしんねいしん佞臣の輩ばかりでしたので、呉は滅んでしまいました。

さすがに稀代の名将でも、内部の腐敗による滅亡は避けられなかったようです。

さすがに後方で足を引っ張られながら戦える人間はいませんから。彼女が前線で頑張ってる間に、金で転んだ人達が呉王の身柄を楚に

移送して、ジ・エンド。

それでも呉王の遺児を救出し、復興の為に頑張っているのですが、何故か奸臣佞臣達ももれなくくつついてきてしまったので、いろいろ苦勞が絶えないようです。

全員ズンバラリツとやってしまえば楽なんでしょうが、呉王の遺児からしてみれば、いつもいない怖い人と、いつもいるやさしい人の争いにしか見えませんか。

下手に手を出すわけにもいかないのです。

たまに手紙を送って寄こすのですが、書いてある事の八割方は愚痴ですから。

そして八つ当たりのストレス発散の為に楚の国内でゲリラ活動に勤しんでいます。

まあ、一番苦勞が絶えないのは副官役の伍子胥さんなんでしょうけど。

孫武さんは政治の事はなんにもできませんから。

というより、能力はあるんですけど、本人の嗜好が正反対の方向にちゃってているので。

その辺りのフォローは全部伍子胥さん任せなんです。

というか、本人がめんどくさがらずにちゃんと政治の方にも手を出していれば呉が併呑されるような事もなかった、とはいかなくともその時期を遅らせる事は可能だったとは思っただけですね。

ああ、また話がそれましたね。

戦国四君として有名な春申君ですが、どちらかというと金持ちの悪党という感じが強いですね。

幽王が実は李園さんの妹と春申君の間に出来た子供だという説もあるぐらいですから。

やっている事は呂不韋のおっさんと殆ど一緒だと考えてもいいでしょう。

ただ、おっさんと似ているけど、最初から貴族だった分苦勞が足りないのおっさんには劣るでしょう。

おっさんの方は、奇貨おくべしで有名なように、趙の人質だった政君の父親を秦の王にまで押し上げた手腕の持ち主ですから。

それまでは、さしてうだつの上がらない商人だったですし。春申君との差ははっきりしています。

おっさんはいつか痛い目に遭わせてやるつもりですが、実力は認めざるを得ません。

まあ、春申君は所詮は二番煎じ、というやつですね。

一応戦国四君に数えられるだけあって、食客も多く抱えています。戦国四君の皆さんはそれぞれ食客三千人は抱えていたと言われています。

食客三千人とか、白髪三千丈とか、とにかく数を大きく言いたい時に使われる三千ですが、少なくとも戦国四君の一人、齊の孟嘗君の食客は本当に三千人以上いたらしいです。

さすがに三千とまではいきませんが、春申君の食客もかなり多いです。

聞いた話では二千にちょっと届かない程度だそうです。

以前は二千数百だったそうですが、将来有望だった李園に離反されたおかげで勢いが落ちているので、往年の圧倒的な勢力は持っていません。

それでも少なくとも楚の国内においては並ぶ者はいないでしょう。李園さんも頑張っているようですが、食客はやっとな春申君の半分といったところですね。

どうせ楚に行ったら向こうから接触して来るでしょう。
煩わしい事この上ないです。
どうにかして避ける方法はないでしょうか。

そんな事を蓉さん柔さんと相談していたのですが、突然よい考えが
浮かんだと言って2人揃って出て行かれました。
これが噂の放置プレイというやつでしょうか。

昼頃出てったきり夕方になっても帰ってくる気配がありません。
その船員共、僕はふられた訳じゃない。
指さして笑うな、潰すぞ。

つまらないので船室に戻って寝つ転がってます。
あのまま甲板に出てたら、船の航行に支障をきたす事態になりかね
ませんから。
いえ、冗談ですよ。
さすがにそこまで沸点低くはないです。

いつのまにか寝ていたらしく、顔をくすぐられるような感触に意識
がゆっくりと浮上していきます。
というか、全身をくすぐられているような気がします。
さわさわと撫でられているような、といっても笑わせる事が目的で
はなく、あくまでも目的が按摩なのだという事がわかる微妙な力加
減の差異。

気持ちよすぎてこのままぐっすり目覚めない眠りに……

……

……

…

いやいや、ここで、ざんねんりょうかのぼうけんはおわってしまっ
た、的な事になるわけにはいかないでしょう。

まあ、按摩されてるだけだから、なるわけはないのだけど。

まあ、うたた寝みたいな状態だから、気持ちいい事は確かです。

もうしばらくはこのまま気持ちよさに浸っていたいものです。

楚についたら、いろいろやらなきゃいけない事が待ってますからね。
孫武さん関係の事とか、呉起さん関係の事とか、後は……李園さん
の事も出来れば押さえておきたいし。

僕は俗物的な人間ですから、できれば楽しんでお金持ちになって、毎
日女の子ときゃっきゃうふふしながらのんびり暮らしたいのですよ。
まあ、今のところかなり予定とは違った人生を歩んでいる事は否定
しません。

僕、政君が中華統一したら隠居して桃源郷で暮らすんだ。

つか、政君がコケたらこの先どうなるかの予想なんてできない。
僕は、自分の手で歴史を作ってやるぜえ、なんて事は考えてもい
ませんので、できるだけ知っている歴史通りに進んでほしいのです。
まあ、問題点としては、恋姫世界でこの時代の歴史なんて全くわか
らないって事だけど……
どっかの種馬君みたいな人が出てこなかったら、知ってる歴史通り
に進むんだらうと、勝手に期待しています。
まあ、知ってる歴史と登場人物が変わってるけど、大まかな流れは
変わらない、と思う。

思いたい……

第17話（後書き）

残念、タイムアップ。

変なところで終わってしまった。

なんか非常に読後感が悪いですね。

続きは……がんばります。

今回は、一応説明会です。

この時代の事をあまり知らない読者もいるだろうという事で、取り敢えず予備知識を。

まあ、知っている人もいるのでしようが、この小説内の歴史は常に捏造されているので。

廖化君がなんか言っていますが、死亡フラグではない、と信じたい作者です。

実はこの時代の中国の歴史についてもそれほど詳しいわけでもない作者です。

つか、話の八割方は捏造だと思ってください。

そもそも、春秋時代の人物が戦国末期に出ている時点で歴史がご都合主義にまみれているのですから。

元々恋姫世界の歴史という事にしてあるので、現実世界の歴史と違いがあってもその辺は全力でスルーを推奨します。

ヘタレなので文句を言われる前に予防線を張っておきたいのです。

キング・オブ・チキンハートの名にかけてっ！

予防線は常に複数張り巡らせる物っ！

うーん。

推敲だの何だのやっていたら、元の文章が跡形もなくなった……
予約投稿入れた時点では3000文字もなかったのですが、今見た
ら4500文字オーバー。
なんでこうなるのかなあ？

なんか言い訳ばかりだ……

ひらきなおれ！

ひらきなおるんだ！

第18話（前書き）

なかなか連続投稿に入れません……

さすがにこれ以上睡眠時間を削りたくないし。

というか、受験生でもないのに一日三時間睡眠って何事？

第18話

第18話

目覚めて、最初に目に入ったのは……

あれ？

未亡人さん？

なんで膝枕なんかしてんの？

他にも途中で船に乗った慎国の女性達が総出で按摩などをしてくれていました。

未亡人さんの膝枕はとても気持ちがいいです。

多分旦那さんによくしてあげていたのでしょう。

横向きではなく縦にした膝枕。

よくわかってらっしゃる。

こうすると頭の座りがいいんですね。

後頭部から伝わってくるのは、柔らかく力の抜けた、でも弛んでない素敵な太腿の感触。

涙が出るほどの至高の逸品です。

別に蓉さんや柔さんの膝枕が下手くそなわけじゃありませんよ？

星沁楼に通っていた頃はよくしてもらっていたものです。

例えば丹さんに膝枕をしてもらって蘭さんに口移しでお酒を飲ませてもらったり……

……丹さんと蘭さんの事を思い出して、ちょっと涙が別の理由で出

そうになりました。

蓉さんも柔さんも元々は妓女。

当然、男の心をとるかすような手練手管は身につけています。

膝枕なんて、基本技能ですよ。

ただ、僕が身請けしてからいろいろ鍛錬などをしたせいで、多少？
筋肉がついてきている事は否定できない事実です。

その所為で、以前よりも膝枕が硬い感じがするのです。

まあ、それでも十分一級品と呼べるものではありませんが。

未亡人さんの膝枕は星沁楼の頃の事を思い起こさせるに十分なものでした。

そして周りに群がる女性達の細やかな手の動き。

筋肉の一筋一筋を丁寧に解きほぐしていくような細やかな指の動き。
力が入っていないさそうで、それでいて入っている絶妙な力加減。

掌で、指で、撫でられ摩られているだけのように思えるのに、はつきりと按摩だとわかる。

まさに極上！ と言えるでしょう

まあ、こんな美人に寄ってたかつて按摩されては、息子の方に血が集まりそうな気もするのですが。

残念な？ 事にピクリとも反応してくれませんか。

まあ、反応したらしたでまずいのです。

と、とにかく、性感マッサージとは一線を画すものである事だけは確かです。

けっして壁際でこちらを見つめてくる二対の瞳に怯えたというわけ

ではありませんよ。

それにしても……状況がさっぱりです。

僕がこの船の雇い主、彼女達は僕が許可を出したから乗れた。

それはわかります。

でも、でもですよ、こんな事をしろなんて要求した覚えはありません。

まあ、事前にこんな技術を持っている事も知りませんでしたけどね。感謝の意を籠めてというのもなかなかに領けないものがあります。

というか、蓉さんと柔さんがこちらを見ているのが気にかかります。十中八九彼女達が何かをやらかしてこうなったんでしょうけど。

その何かというのがさっぱりわかりません。

取り敢えず、害意を持つての行動ではなさそうですから、ここは思う存分この天国を享受しようかな？

未亡人さんに顔や頭を撫でられて、僕はまた夢の世界に……

いやいや、これでは話がいつまでたつても進みません。

いいかげんに起きる事にしましょう。

「で、なんで僕はこんな状況になってるんでしょうか？」

目を開けた僕の前には、蓉さんに突きつけられた鏡。

そこに映った僕の姿は、化粧を施され、女性物の服を着て、新しい扉が開けそうな……

すいません、嘘です。

いえ、化粧を施されたのは事実ですが、女装うんぬんや新しい世界

が見えそうなんて事はありません。

第一、僕は女顔ではありませんし、女性に間違われるような体型でもないです。

鍛冶屋としていつも鎚などをふるってきましたし、変態な師匠に鍛えられているので、しっかり筋肉もついていますからね。

いつものさえない人並みの顔にはくつきりばつちりメイクが施され、意志の強そうな顔に早変わりしており、肌の色も浅黒くなっています。

多分この顔のまま王翦さんや政君に会っても、僕だとは気付かないんじゃないでしょうか。

まあ、つまるところ日焼けして精悍そうな男が鏡には映っていたわけです。

一応本職は鍛冶屋ですから肌焼けはしていますが、それは日焼けとは違うのですよ。

鉄を鍛つのに上半身裸で、というわけにはいきませんからね。

服を着て防護されている部分とそれ以外で焼けむらがあるのです。

普段はあまり気にしていませんが、こういう風に化粧を施されてみると結構目立っていたんだなあ、と思います。

「で、わざわざ化粧をした理由というのは聞かせてもらえないんですかね？」

各国のお偉方にそれなりに顔を知られている身としては、変装をするのに文句を言うつもりはありません。

事実、面倒事に巻き込まれるのは嫌ですから、正体を隠すつもりでしたし。

まあ、それと同じぐらい面倒事に首を突っ込もうとも思っていました。

自分から突っ込むのと巻き込まれるのは別物なんですよ。

そういうわけで、元々変装はするつもりでしたから、変装自体について文句があるわけではありません。

僕がしようとしていたのは、せいぜいつけ髭をつけるぐらいでしたので、ここまできつちりやってもらって文句など出よう筈もありません。

ただ、なんで相談もなしに変装させたかが気になるわけです。言ってくれば断ったりしないのに。

そんな僕の疑問に答えを返してくれたのは、蓉さんでした。

なんでも二人で船室から出て行った後。未亡人さん達に割り当てられた部屋の前でたむろしている船員達を見かけたそうです。

そんなところにいる必要のない人達のあやしい行動を曲がり角から隠れて見ていたそうですが、いきなり部屋に押し入っていったので慌てて後を追って乗り込んだところ、少年を人質に彼女達に乱暴をしようとしていたとか。

「で、その不埒な船員達はどうしたんですか？」

「……」

「そこで黙られると、怖い想像しかできないんですが」

「……別に命に別状はありませんよ？ 船が動かなくなると困りますからね。ただ、三本目の足を斬り飛ばしただけで済ませました。私達がか弱い乙女ですし、情け深い性質たちですから」

「……それは男性にとっては死ぬほどつらい事なんですけど……」

第一、問答無用で息子を斬り飛ばされた事を情け深いと思える男はいません。

まあ、今回の場合ケダモノ共の自業自得でしょうし、僕がその場に

いたら多分斬り飛ばすのは首だったでしょうから命があるだけ儲けものと思ってもらうしかなさそうですね。

まあ、僕は血を見るのは好きではないので、折るだけで済ませると思えますが。

首の骨か息子の二択、で選ばせるぐらいの事はさせてあげるかもしれませんが。

ちなみにこの船で働く船員は三交代制を採っています。

一つの班は仕事、一つの班は睡眠、一つの班は休憩ですね。

まあ、一班の人数はそれほど多いわけではありませんが、24時間誰かしら働いているという事になっています。

一日の三分の一だけ働けばいいというのはかなり待遇のいい仕事です。

この時代、半日以上労働なんてざらにありますからね。

その代わり当番の時間に休憩はありませんが、それでも随分と高待遇です。

ああ、この時代に労働基準法なんてものはないですよ、当然の話ですが。

こんな体制を採っているのは、川にも盗賊や強盗がいると聞いたからです。

自慢ではないですが、僕は泳げないのです。

服を着て泳げないとか、そういう話ではありません。

身につけているのがふんどしいつちよだるうが、イチジクの葉っぱ一つたろうが、そんな事には関係なく沈んでしまうのです。

知らない間に敵に乗り込まれて川に放り込まれでもしたら、間違はなくドザえもんになってしまいますから。

自己紹介で、僕ドザエモン、というのもあれですし。

命が金で買えるなら安いものですよ。

特に自分と女の子達の命が懸かっているんですから、金に糸目をつ

ける気はありません。

まあ、大声でいうのも恥ずかしい事なので、周りには適当な事を言
って誤魔化しましたが。

まあ、この際僕が泳げない事はどうでもいいのです。

「で？ 僕が仮装……じゃなくて変装をする理由の説明は？」

さっきの説明でわかったのはこの船の船員の中に性別変更した人達
が出たという事ぐらいです。

そのうち師匠に紹介でもしてあげましょうか。

いえ、あんなのがこれ以上増えると秦国が大変な事になるのでやめ
ときましよう。

一年後に戻ってみたら、そこは漢女の国だったというのは勘弁願
いたいです、ハイ。

答えを返してもらったと思ったら、全く質問した事の説明にはなっ
てませんでしたね。

「それについては、艾夫人^がから説明してもらおう事になってるわ」

「？ 艾夫人？ 誰ですか、それ？」

「貴女が船に乗せてあげた人よ。それぐらい知ってるでしょ」

「あ、そうなんですか。名前聞いてなかったもので……」

どうやら未亡人さんの姓は艾というらしいです。

僕は女好きな事は否定しませんよ。

事実ですからね。

だからと言って手当たり次第に手を出すというわけではありません。
ちゃんと自分なりの基準というものがあるのです。

勿論、既に結婚した人に手を出す気もありません。たとえ、それが未亡人でもです。

まあ、手を出される場合においてはその限りではないのですが。誘われたら喜んで手を出します。

第一誘ってくれた女性に恥をかかせるなんて男のする事じゃありません。

さすがに夫がいる相手には自重しますが。実際、孫武さんには娘もいるわけですし。

矛盾？

してまずけどそれが何か？

人間とは移ろいやすい生き物なのですよ。

ちなみに孫武さんの旦那さんは孫嬢ちゃんが生まれる前になくなっていきます。

死因は……たぶん皆さん想像がつくと思いますが。

わかりやすく言うとあれです、腹上“ピー”ってやつです。

「で、そろそろ理由を説明してくれないでしょうか？ なんていきなり変装なんてしなくちゃいけない事になってるんですか？ しかも僕に何も言わずに」

そうちょっと語気を荒げて言ってみると、蓉さんと柔さんが互いに目配せを始めた。

ああ、どっちが説明するか相談してなかったのか。

色々考える事が多かったのか、それとも同時に複数考える事が面倒だったのか。

柔さんとはかく、蓉さんは確実に後者でしょう。

そんなこんなで互いに目配せし合って説明義務を押しつけようとしている2人と、それを眺める僕がいました。

そんな状況が終わらせたのは意外にも僕の頭の方から降ってきた声でした。

頭の方から降ってきた声。

つまりは僕に膝枕をしている艾夫人しかいない。

さて、どんな理由を聞かせてもらえる事やら。

あんまり突拍子もない事でなければいいのだけど……

めんどくさい事に巻き込まれる予感しかしないのですが……

どうせなら美女・美少女とフラグがたつ予感がすればいいのに……

第18話（後書き）

話が長くなってきたので、ここでいったん切ります。

一話あたり、3000〜4000前後と決めているんですが、このまま書きちゃうと、5000オーバーでは済まなくなってきたそうなので。

続きは……出来るだけ早く投稿できればいいなあ……

話が途中で切れると、書いてる本人も納得が出来ないですからね。目標は日本追放前にあと一話更新！

第19話(前書き)

全然話が進んでいません。

ひよっとしたらあとで書きなおす事になるかもしれません。

それでもよろしければどうぞ。

第19話

第19話

前回までのあらすじ。

突如頭の中に響く、女性の助けを求める声。

その声に導かれ、現世での生を終えた男が生まれおちたのは紀元前の中国。

可憐な乙女が、妖艶な美女が戦場を駆ける。

世紀末の中国。

新しく受けた生で授かった名は、廖化。

三国時代の武将とは同姓同名の別人かもしれない。

塵芥じんがいスベックのボディに尽きせぬ情熱よくほうを胸に秘め。

秦の始皇帝の（ハーレム）誕生を阻む為、日夜女性を口説き落とす為に邁進する廖化。

心を通い合わせた意思ある強化外骨格漢女おとめ、そして師匠である西施と共に嬌声乱れ飛ぶ夜の戦場を駆け抜ける。

数多の乙女と知り合い、更なる成長を続ける廖化の前に、ついに現れる僕ツ子王翦。

その口から語られる驚愕の事実。

敵は匈奴の血をひく卑劣な偽漢汗カンガン・？？？、そしてその背後に控える

は知る者として知らないと言を濁す求尻鬼・にして漢女道の反逆者徐福……じゃなくてこの大陸で知らぬ者のない性戯の宰相・呂不韋。道端で拾った猿の助さん、狐の格さんを旅のお供に迎え、心と身体を触れ合わせてきた乙女達の想いを胸に、廖化印の竹棒を振り回す我らが主人公廖化君の新感覚学園熱血恋愛世直しの旅は今ここに幕を上げた……

な感じだったと思います。

まあ、与太話はさておいて。

というか、声に出してもいないのに壁際からの二対の視線が痛すぎるので、現実逃避はここまでといたしとつござりまする。

「あの一、話聞いていただけでます？」

ぼーっと現実逃避をしていたのがばれたのか、頭の上からは艾夫人の不満そうな声。

いやね、話は聞いてましたよ。

つまりは慎国よこさんかこらあつて春申君のところに殴りこみかけるんで、その助太刀に雇いたいって事ですよね。

見た目はお淑やかな、まさに大人の色香にあふれた女性だったのに、中身が残念すぎる。

なんで思考回路が極妻なんだ……

なまじ話し方がのんびりポヤポヤとした感じなだけに違和感がすごい。

乗船の時に挨拶された時もこんな感じだったから、なおさら中身と

のギャップがすごい。

そうはいつても、ギャップ萌えとは全く縁がないのが悲しいが……

報酬が私達の身体を好きにしてっというのも、ねえ？

つまりは鉄砲玉役を引き受けさせる為に、女の武器を使って役立つ道具を物色してるって事で。

喰ったら食中りを引き起こすだけで済めば可愛いものだろう。

これはないわあー。

なんか、もう色々と萎えたんで、この何代目かは知らないけど姐さんから逃げ出したい気分です。

ええ、逃げ出したいんです。

こう言っているって事は、つまりは逃げ出せていないって事で。

現在の状況を確認させていただくと。

艾夫人の膝枕と全身に女性が群がってるという状況は変わっていません。

艾の姐御あひの拳が左右のこめかみに添えられているのと、按摩していた筈の手がいつの間にもやう穴道けつどうを抑えている事を無視出来れば、ですが。

ちなみに穴道とは、簡単に言うと気の通る流れの重要な関門の事です。

そこを押さえられると気は当然の事ながら全身にまわりません。

つまりは、なんとかが将クラスだった僕の武は一般人レベルまでがた落ちしているという事です。

まあ、つまりはまったく身動きが取れなくなっているというわけで

す。

動かせる眼だけで壁際の2人に必死に救援を要請しているのですが、何故か救出に動く気配はまったくありません。

それどころかどこか面白がっているような、笑いを隠す為に怒った顔を作ろうとしているかのような、そんな感じの面白い顔をしています。

取り敢えずさっきの痛い視線はなくなっているので、怒っているわけではないと思うのですが。

僕は、見捨てられたのでしょうか？

というより、これは脅迫と考えてもいいのでしょうか？

僕は自由を愛する雲のような男。

束縛される事なんてまっぴらです。

男にはたとえ不利とわかっていても貫かなければならない矜持というものがある事を、彼女達に見せつけてやらねば。

すいません、嘘です。

普通に怖いです。

それこそ心の汗が下半身から溢れださんばかりに。

おらガクブルしてきたぞ、なんて可愛らしいものじゃありません。

戦を経験し、人を殺す事も経験しているとはいえ、人間の本性というものはそう簡単に変わるものではありません。

僕の武術の身につけ方を見ていただけるとわかると思いますが、まず痛いのがいや、というのが大前提になっているのです。

どんな攻撃も通らないような鎧に身を固めているのはそういう事で

す。

そして、鋼の武具を決して売らないのもそこに理由があります。

本音を言えば、鉄製品だって売りたくないですよ。

まあ、シエアはほぼ完全に独占していますし、売り先だって厳選しています。

見返りとして歴史上名高い将とお近づきになれましたし、ある程度身分の保障もされているし、莫大な財を手にする事が出来たので、差し引きゼロとしています。

そんなわけで鉄製品に関しては、どれだけせつつかれようとも誰にも伝授するつもりはありません。

まあ、鉄自体に関しては他の人も少数ですが使える人はいますから、禁止しても意味はないのですが。

それは全て型物、つまりは鋳造物ですからね。

強度も何もかも比較にすらならないんですよ。

まあ、それでも青銅と比べたら上なわけですが。

伝授するつもりがないのは鍛造法についてです。

こればかりは墓の下まで持っていくつもりです。

まあ、死んだ後の事まで責任はとれませんから、別に関係ないような気もしていますが。

考えが脱線したので元に戻しましょう。

「僕が脅迫に屈するような男に見えるとでも思っているのですか？
随分となめられたものですね」

正直、本気で脅されなくても簡単に膝を屈してしまいそうです。というか、膝枕をされて、女性に囲まれている状況でこんな事言っても、ちっともかっこよくないでしょう。実際、身動き一つできないわけですからね。

だからと言って弱みを見せるわけにはいきません。それでも何とか活路を見つけ出したいと思うのです。

こんな予期せぬ形で終わる、なんて簡単に諦められるものじゃないですから。

まだまだ美女との出会いが足りないのです。

まだまだいろんな女の子が僕を待っているのです。

そして何よりも、まだまだ僕は満足しちやいないのです！

力の限り足掻いて足掻いて足掻き続け、最後には勝利ハイレムエンドを目指すのです。

「ですから、いいかげんに理由わけを話してもらいたいんですが」

そこだけは動く目で、しっかりと艾夫人を見つめ話しかける。

冷静に考えてみれば、おそらく彼女にこのような事態になった事の原因があるのは明らかですから。

たとえば姐さんだろうと、身体の一部が縮こまっていようと、身体からだの自由が奪われていようと、このままではいられません。

先程は状況の変化にびっくりしすぎて、つい我を失ってしまったようです。よく考えてみなくても蓉さん柔さんの態度はおかしいです。

少なくとも彼女達に見捨てられるような真似をした事はないつもり

です。

初めて会った人に味方して、僕を窮地に陥れるような人ではない事もわかってはいるつもりです。

ならば何故、彼女達は艾夫人達を止めようとしなののか。

おそらく、いや、間違いなく、彼女達と艾夫人の間で既に話がついているのでしょう。

そして、今のこの状況は……彼女達の茶目つ気？ と考えてもそれほど的外れではないと思います。

まあ、心臓に悪すぎるので勘弁してもらいたいです。

別に年寄りというわけではありませんが、ハラハラドキドキは必要ないので。

いえ、それが美女との、というのでしたら、喜んでと言いたいのですが。

こんなシチュでは御免こうむりたいわけです。

そんな事は考えながら艾夫人の方をじっと見ていたら、漸く口を開いてくれました。

第19話（後書き）

この後しばらく更新できなくなります。

というか、作者が日本を立ち退きます。

日本に戻ってこれる日は未定ですが、ネット環境が構築でき次第こちらの方には復活します。

日本に戻る為には恩赦が必要……とまではいかないですけど、社長が領かないとどうしようもないので。

取り敢えずしばしの間、おさらばです。

第20話(前書き)

うん、まあ、その、なんだ……

まだ船から降りてないのはどういつわけだ、とかのシミコミは無
の方向でお願いします。

それでは、どござ。

第20話

第20話

膠化です。

結局、依頼を引き受ける事になった膠化です。

据え膳は食わぬ膠化です。

というか食ったら食中りで死にそうなので手が出せません。

毒の入った据え膳をわざわざ食うほどバカではない膠化です。

という事は……つまりはただ働き！？な膠化です。

毒消しを常備しておくんだつたと後悔しきりの膠化です。

つよければ〜それで〜いいんだ……

ちからさえ〜あれば〜いいんだ……

みなしごのバラードが頭の中をエンドレスで流れまくってる膠化です。

、そんなわけで（どんなわけだというツッコミはおいといてください）交渉の結果はそういう事になりました。

いえね、粘ったんですよ。
さすがにただ働きは嫌じゃないですか。

それでも彼女達の出せるものは自分達の体しかない、という事で。

膠化脳内会議が盛大に開催された結果、引き受ける事になりました。
毒を喰らおうという意見が通らなかつた事にほっとした自分がいます。

まあ、これで大きな貸しが出来たので、楚ではある程度の無茶が出来ますし。

今回の楚では色々やらかすつもりではあつたんで、後始末を押しつけるという事で返してもらうつもりです。

世の中にただほど高いものはないという事を、喜びのあまり目の前で百合プレイを始めてくれた艾夫人御一行にはしっかりと覚えてもらいましょう。

まあ、見るだけなら食中毒にはなりませんから、堪能たんのつさせていただきますか。

さすがに10人からなる美女の集団が目の前でくんずほぐれつしているのを見ると身体の一部が元気になるのは否いなめないわけです。

そんなわけで、柔さん蓉さんの手を引いて自室に半日ほど籠らせていただきました。

太陽が黄色くたって、床が天井だって、視界がハレーションを起こしていたって人間は生きていけるものだと理解しました。

というか、お2人が強すぎました。

星沁楼時代は、4人纏めてノックアウトする程に圧倒的優勢だったのですが、気の使い方を教えてからというもの連戦連敗が続いております。

とんでもなくタフになってるんです。

その上怪しげな房中術やら何やらと、そちらの技術の習得にも余念がないようで、すっかりワンサイドゲームになってしまいました。

1人1人相手ならともかく、同時攻略は腎臓機能の回復が追いつきません。

散々搾り取られて動くミイラ一歩手前の僕と、つやつやのお肌の柔さんと蓉さん。

勝敗は誰の目にも明らかです。

まあ、勝負しているわけではないですけど、負けた気になるのは仕方ないでしょう。

いつか必ずリベンジを……とは考えませんよ？
考えるだけ無駄ですからね。

そう言えば、艾夫人達にされた化粧。
あれってなかなか落ちないんですね。

どうやったのかはわからないけど、肌の色から変わってるあたり、かなりとんでもない技術の様な気がします。

まあ、専用の化粧水を使えば落ちるらしいんですが。

……転生者なんてまぎれていませんよね。

2人が止めなかったのもこの化粧技術を習得したかったからとかなんとか。

他にも色々理由を挙げていたようですが、やはりこれが一番の理由だったと思います。

彼女達の様な美人でも、いや、彼女達の様な美人だからこそ必要なのでしょう……

……あれ？良く考えてみなくても本当に売られていたようです……
まあ、綺麗な人がより一層綺麗になるのは嬉しい事ですし、

「私達が綺麗になった姿を見たくないの？」

なんて聞かれたら、反論の言葉なんて出てくるわけがないので、これは諦めましょう。

これからどんどん増えていく、というか増やしていくつもりで親しい女の子達にも伝授してもらいたいですしね。

やはり年とっても綺麗な方がいいじゃないですか。

あれ？

なんだかんだいって、結構こっちにも利益が出てますね。

……代価が僕の命を賭けた強制労働という点に目を瞑る事が出来れば、の話ですが。

取り敢えずこれで、楚の国に乗り込んでも正体が露見する恐れはなくなっただので良しとしますか。

まあ、別に指名手配されているわけではないですが、纏わりつかれると鬱陶しいですからね。

綺麗どころに群がられるならともかく、髭の生えたむさくるしいおっさん達に囲まれるなんて御免こうむります。

……ところでこの世界って恋姫の世界ですよ。

漢女がいますし、史実上有名な武将も女性が多いですし、外史の管理人もいますし。

原作では気にしていなかったけど、男の人っていた記憶ないんですよ、種馬以外。

まあ、兵士と黄巾とか、モブ扱いでは男が多かったですけど。

それにしても主要な役どころに男が多いんですよ、この世界。少なくとも恋姫の世界ほど女だらけって事ではないんですよ。偽宦官とか宰相達とか、結構な割合で男がいるのが不思議です。

多分、この後男が淘汰されていくんだろうなあ。

僕以外の男が淘汰されていく事には大賛成ですから、庇おうとは思いませんが。
つか、いつ起こるかなんて知りませんから、手の出しようもないのですが。

……淘汰される側になったらどうしよう……

取り敢えず逃げ道は確保しておかなければいけないようです。
間違っても偽宦官や工口親父と一緒に粛清されるなんて事はないと思いたいですが、だからといって油断するのも愚かな事ですからね。
取り敢えず、まだ七国の手の届かない南方か北方の方に受け入れ先を探しておかないと……

淘汰云々を抜きにしても、いざという時の備えをしておくにこした事はありませんからね。

この先増える……というか増やす女の子達の事も考えたらある程度の地位は必要となってくるでしょうし、それなりに過ごしやすい場所を選ばなくてはいいけません。

鍛冶屋は……うーん、どうなんだろう……
安定した収入が得られますし、妄想と勢いに任せて出来る仕事なのでこのまま続けたいところですが、逃げる事とかを考えるとあまりよろしくないんですよね。

新しい仕事を考える必要がありそうです。

現在は咸陽に居を構えていて何も不自由がないとはいえ、さすがに

万が一政君が暴君になった時の事を考えると、この先もこのままというわけにはいかないでしょう。

まずは定番の抜け道作りから始めますか。

今回の旅では色々とお近づきになりたい人もいます。

楚ではやっぱり李園さんですかね。

会った事はないけど、美人さんと聞いていますし。

本人の能力も高そうですし、今回の依頼に関しても協力してもらった方が楽できそうですし。

なにより、このまま楚に置いておけば王翦さんに殺られちゃうでしょうから。

さすがに今すぐ引き抜くのは難しいと言わざるをえませんが。

なにしろ、史実では楚国の滅亡まで一人頑張っていた筈ですので。

あんまり早く引き抜きすぎると、楚の滅亡が早まるかもしれません。そうなる と必然的に秦の始皇帝即位も早まる、というか、僕の脱出にかける時間が少なくなってしまうから本末転倒な話になってしまいます。

……あれ？李園さんがいなかったら生贄君の楚侵攻って成功するんじゃないかね？なんて考えていませんか？

……ひょっとしたら王翦さんの出番なくなったりして……

深く考えるのはやめときましょう。

あまり頭のよくない僕が考えたところで、まともな結論が導き出されると思えませんし。

べ、別に、王翦さんをハーレムに入れるかどうかを悩んでいたわけではありませんからね。

とか、誰得のツンデレ風味な考えはなかった事にして。

というより、そんな身の程知らず、というか命知らずな真似はできませんって。

友人としてならともかく、恋人関係を結ぶ相手としては、王翦さんは体の一部が……

僕の好みは母性おばい豊かな人ですから。

豊かすぎるのも困りますけど。

やはり程よい母性は必要不可欠なのですよ。

まあ、かといって、ボン・ボン・ボンな人はそもそも女性としては認めませんが。

やはり人並み程度のボン・キュツ・ボンは欲しいのですよ。

まあ、世の中にはぺたこそ正義とか、幼女好きとか、そういう趣味の人がいる事は知っていますから、それ以外は邪道とまで言う気はありませんが。

その辺りは個人の守備範囲の違いって事で、一つ。

……悪寒に襲われたので、これ以上この事について考えるのはやめた方がいいでしょうね。

秦に帰ったら物理的に命が危なくなりそうです。

問題は楚王と太后なんですが……

このあたりは臨機応変にいきましょう。

さすがに見殺しにしたら、李園さんがどう出るかの予測がつかませ

んし。

李園さん関係でなければ、即見捨てたいところですけどね。

助けたところで何も旨味なんてありません……いや、太后は美人さんでしょうけど……未亡人っていう言葉の響きに心惹かれるものがあるのは否定できませんけど……

……会ってから判断する事にしましょうかね……
さすがに性格も知らないうちに何もかも判断する事なんて出来ませんから。

臨機応変ですよ。

いきあたりばったりではないですからね。

孫武さんは……取り敢えず楚が終わってからという事にしましょう。下手に手を出すとんでもない事になりそうな人ですし、何より楚とは敵対関係にある人ですから、迂闊に接触していい事はないですよ。

というか、十中十面倒事になる気がします。

勘ですが、外れそうにないのは今までの経験のおかげでしょう。

十中八でも九でもなく十なのが悲しいところですが。

ええ、ほんとに色々ありましたからね……

他にも何人かめぼしいところを見つくりたいところですよ。

李園さんも孫武さんも今すぐ秦に連れていく事ができませんからね。

取り敢えず建前……じゃなくてこの旅の目的である政君の天下統一に役立ちそうな人が見つければいいんですけど……

正直、楚にあまり人材がいるとは思えないのが痛いところではあります。

春申君とか、潰れてもらおう予定の貴族達の食客から適当に見つくる
ってみましようかね？

まともな人材が見つければいいなあ……

齊では……

まあ、楚が終わってから考えましょう。

楚で引き込むメンバーによって予定が変わる事は十分考えられます
からね。

取り敢えず、関係のある女性ぐらいは全員救いたいとは考えている
んですけどね。

揃いもそろって一国の將軍とかそんな重要な役目についているから、
タイミングが難しいです……

まあ、最初からわかっていた事ではあるのですが……

賢者タイムが終わったところで、そろそろ楚につくよつです。

次からは、ずっと僕のターン、になったらいいなあ……

第20話（後書き）

やっとこ次は楚の国に入れるかなあ……

まさか船に乗ってるだけでこんなに話数食うとは思わなかった……

もうちょっと小説の書き方を勉強しましょうって事ですね、ハイ。

一話あたりの文字数増やすってのはちょっと無理なんで。

執筆速度が地を這ってるのに、話の進み方まで亀……

なんか色々とごめんなさいです。

それでは、次回の漢女十無双、危ない三人、西施と太后と偽宦官。
ついにノクターン進出！？ にご期待ください？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9562n/>

原作開始まであと何年？

2011年4月4日00時11分発行